
ナイトで軍師さま？

大和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ナイトで軍師さま？

【Nコード】

N9252C

【作者名】

大和

【あらすじ】

ことの始まりは一枚の招待状だった。幼なじみ達との楽しい旅行のハズだったのに…。船のトラブルに巻き込まれるわ、知らない世界に飛ばされるわでスゴい事に…。オマケに軍師さま？仕方ない。元の楽しい旅行…じゃなくて、元の世界に戻るために一肌脱ぎますか！ついでにこの世界も救ってやろう！異世界流軍師さまつてのを見せてやる！…………でも、ホントに元の世界に帰れるのかなボク？

素敵で奇妙な豪華客船

僕の目の前を青い景色が埋め尽くしている。

上を向くと広い青空があつて、前を向けば水平線一杯に海が広がっている。

僕は今、広大な大海原を進む豪華客船の上に立っている。

「偶然であるんだな」

つい先日、たまたま商店街で福引き券を買つて、それがなんと特賞を引き当ててしまった。その景品が、今乗っているこの豪華客船の招待券と言つわけだ。

「いやー、本当にラッキーだよな。こんな機会でもなきや乗れないもんな」

周りを見渡すと他の乗客達の姿も見える。

そのほとんどはカップルなのだが、今僕の周りには誰もいない。

「はあ、まだ船室でダウンしてるのかな？」

一応この旅行は一人旅のつもりできたのだが、招待券にはペアでと記入されているため仕方が無いのもう一人誘つたのだ。

それが、さつきから船酔いでダウンしている方つてわけだ。

「おい。生きてる？」

部屋に戻り、ベットでうつ伏せになっている人間に声をかけたが返事が無い。

「死んだか」

「生きてるわよ！」

寝ていた人物が起き上がり怒鳴り返してきた。

「はうう」

が、すぐにまたベットに倒れ込む。

「ううう…頭がグラグラする。気持ちワルい…」

そんな状態の連れに僕は頭を抑えた。

（船に弱いのになんで付いて来るかな…？）

彼女は僕の近くに住んでいる幼なじみで、僕が当てたこの招待券を見て一緒に行きたいと言ってきたのだ。

確かにこの船に乗る条件はペアである事なのだが、何故こうなる事が分かってにいるのに乗りたがったのか全くもって分からない。

「わかったから、頼むから大人しく寝ていてくれ…」

「…わかってるわよ。あゝ最悪」

（仕方がない。甲板に戻るか）

僕は静かにドアを閉めると来た道に戻って行った。

階段を登り甲板へ出ようとしたら何者かにぶつかった。

「きゃあ！」

「うわっ！」

僕の方はなんとか近くの手すりに掴まって堪えたけど、相手は見事に尻餅をついた。

「あ！帽子が」

その拍子に被っていた白い帽子が取れて風に飛ばされてしまった。

「よっと！」

上手くジャンプして掴むと、その帽子を返してあげた。

「すみません。大丈夫でしたか？」

帽子の持ち主は僕と同じ位の女の子だった。

淡い青色のワンピースに明るい黄色のリボンで、背中まである長い髪をまとめている。

小柄で華奢な印象を受けるがスタイルは悪くなさそうだ。

「あ…はい。大丈夫です　　たぶん」

「たぶん？」

「え？　　ああっ！大丈夫です！はい！」

「そ、そう…」

（なんか、本当に大丈夫かな？）

僕が帽子を返した時もなんだかボーっとしてた気がするけど、本人が大丈夫って言っている以上問題は無いだろう。

「あの…もしかして、これから甲板に行かれるのですか？」

「そうだけど？」

立ち上がり洋服を軽く叩いて汚れを落とすと、いきなり聞いてきた。

「もしよかったら一緒に行きませんか？」

「え？まあ、良いですけど」

「よかった」

胸の前で小さく手を合わせると、安心したように微笑んだ。

(…さっきは気が付か無かったけどこの娘、結構可愛い顔してるな) なんと言うか、見ているとホッとするような優しい笑顔だった。

甲板にあるテラスへ戻ってきた僕はまた海を眺める事にした。

空を見上げると、さっきよりも雲の量が増えてきたようだ。

恐らく天気が崩れてくるのだろう。

「いい風が吹いてますね」

僕の横からさっきの女の子が、風に髪をなびかせながら並んできた。

「えっと…」

声をかけようと思ったが、そう言えばまだ名前を知らなかった。

「そう言えばまだ名前を聞いて無かったよね。僕の名前は神城拓真

かみしろたくま 君は？」

「あ、私は咲杜美琴 さきもりみこと と言います。あれ？もう一人お連れさんがいませんか？」

「もう一人？ ああ、聖の事か。アイツは僕の幼なじみで天馬聖 てんまひじり って名前なんだ」

「素敵なお名前ですね」

「 現実には名前負けしてるけどね」

「そうなんですか？」

「うん…」

アイツは昔っからわんぱくで、《じゃじゃ馬聖》なんて呼ばれてたっけ？

「ところで神城さんはどうやって、この船乗られたんですか？確か来賓の方々以外の方は乗船出来ないと思ったのですけど…？」

「うーん、たぶんその来賓なんじゃ無いかな？僕達は福引きの特賞のチケットで乗れたんだ」

そう言つてポケットに入れておいた乗船チケットを見せた。

「あら？このチケット……」

咲杜と名乗った女の子は僕の渡したチケットをジーツと見つめた。

「間違い無いですね。コレはお父様が用意した一般客用のチケットですね」「へえー、そうなんだ　ん？」

今何か引つかかる言葉を聞いたような……。

「お父様？君の？」

「はい。ついでに言つてしまえばこの船もお父様の自家用船なんです」

「……自家用船って」

個人所有の豪華客船っていったいナニ？

「ん？てつ事はもしかして――」

僕はもう一度チケットを見た。

（確か主催者の名前が――）

そこに書かれていた名前は咲杜葉一　さきもりよういち　となつていた。「咲杜葉一って確か……」

「私のお父様の名です。……では改めて、お父様の主催した誕生日パーティーへようこそ！神城拓真さん」

「あ……どうも。でも誕生日パーティーって君のお父さんの？」

「いいえ、私のです」

「咲杜さんの誕生日なの？」

「はい。今日で16歳になります」

「へえ……。じゃあ僕の一つ下なんだね。僕はこないだ誕生日だったから17歳かな？」

「まあ！そうなんですか？それはおめでとunggざいます」「ありがとうございます。こちらこそ誕生日おめでとungg」

「ありがとうございます……ふふっ」

「あははっ」

いつの間にか二人の間には優しい空気が包んでいた。
そして二人も……いや、この船に乗っている誰もが気付かなかったのだ。

海面を漂う奇妙な霧の存在を。

その夜、船の中央ホールのパーティー会場に拓真と聖は向かっていた。

当初は礼服などを持ってきて無かった二人だが、無料でレンタル出来るであって借りて着替えたのだ。

「それにしても、良かったな」

「なによ拓真？」

「船酔いだよ。もう良いんだろ」

「ああ、まあ薬も効いているみたいだしね。多分大丈夫だと思う」

「そうか　ああ、あとさ」

「今度はナニよ？」

「よく似合ってるよ。これで言葉使いも良ければ素敵なレディーなんだけどね」

「余計なお世話よ。　でも、ありがとう」

「ん？何か言った？」

「何でも無いわよ！バカ！」

「何だよ急に？」

「ふん。私先に行くから付いて来ないでよね！」そう言ってスタスタと先に行ってしまった。

「なんだかな？せつかく誉めてあげたのに」

僕は不思議そうに首を傾げるしか無かった。

「あのー神城さん？」

「はい？」

いきなり後ろから声が聞こえて振り向いたら、咲杜さんが立っていた。

「こんにちは」

「あれ？咲杜さんはどうしてここに？」

パーティーの主役がこんな所には不味いのでは？と思うのだが。
「財政界のパーティーと言うのは、豪華な様でいて実際はつまらないものです」

「なるほど…」

それで抜け出して来たと言う訳か。

何となく理解できた。

「ちよつと拓真！いつまでほつつき歩いてんのよ！」

と、今度は前から先ほどパーティー会場に向かっていた聖が戻ってきた。

「どうした聖？先に行ったんじゃないや無かったのか？」

「アンタがいつまで経っても来ないから迎えに来たのよ！」

「迎えにつてまだ2分も経つてないぞ？」

此処からパーティー会場まではまだ5分位かかる。

なのにすぐ戻ってきたという事は…。

「聖…お前、もしかして道を知らないんじゃないだろうな？」

十分あり得る事だ。

聖は船に乗ってからずっと部屋で休んでいた。

「うつさいわね！…って言うかその娘だれ？」

やはり図星だったか。

「この娘？この船のオーナーの娘さん。で、これから行くパーティーは彼女の誕生日会ってわけ」

「この船のオーナー…確か咲杜葉…って名前だったよね？で、その娘さんという事は…」

聖は少し考えると時雨さんを指差して叫んだ。

「あー！もしかして美琴ちゃん？！」

「お名前を聞いてもしかしたらと思いましたか、やはり聖ちゃんでしたか」

聖ちゃん？

美琴ちゃん？

この二人つてもしかして知り合いなのか？

「あゝ、もしかして二人共知り合い同士なのか？」

「何言ってるのよ？拓真だって知ってるはずよ。ほら、お向かいに住んでいていつも窓から見ていた―」

「あー思い出した。僕がいつも聖に引きずられて行ったあの家の女の子か」

「べつ、別に引きずってなんか無いでしょ！！」

「よく言うよ。人がゲームしてる最中に無理矢理押しかけてきてさ

―」

「あれは拓真が休みなのに家に閉じこもってるのが悪いんでしょう？！」

「別に聖は関係なかったろ」

「関係あるわよ！」

「どこが？」

「…それは その 色々よ！」

「なんだそりゃ？」

なにやら理由がメチャクチャな気がするが、コイツの場合は気にしても仕方無い。

「ふふふつ。お二人共相変わらず仲が良いですね。六年前と変わってない」

「そうかな？」

「私は別にコイツとなんか」

「コイツとは失礼な言い分だな」

「なによ？」

「別に？」

うゝ、と睨み合う二人をよそに咲杜…いや美琴はクスクス笑っていた。

「やっぱり仲が良い」『ふんっ！』と、二人同時にそっぽ向く。

いつもの事とは言え、どうして聖は僕のやる事に色々ちよっかい出して来るのだろう？そう考えていたら、突然大きな振動が襲ってきた。

「危ない！」

僕はとつさに二人を庇ったが、足場が揺れている為二人の下敷きになる形となった。

女の子とは言え二人はさすがに重い。

「…うを！」

重い…が、状況はそれどころじゃ無かった。

何か布のような物に覆われて目の前が真っ暗になったと思ったら、柔らかいものが顔にのし掛かってきた。

ふつくらと丸い何かで息が詰まりそうになる。

で、右手と腹部にも同様の…いや、コツチはふにふにと柔らかいものが2つ乗っかっていた。

「——！！ちょ…ちよつと拓真！？息をかけないでよ！ やっ、くすぐったいって！」

「か、神城さん！ その、手をあまり動かさないで下さいませ—— ああっ！だっダメですって！」

一体何が起こってるんだ？

一体僕が何をしてるって言うんだ！？

だが確かに僕が動くと上の二つも、もぞもぞと動く。

これはもしかして。

息苦しい中、僕は恐る恐る聞いてみた。

「ねえ…二人共、今僕のどこに乗っかっているの？」

「ばっバカ！しゃべらないでよ！——ひゃう！！」

「あ…あの、まず聖ちゃんが神城さんの顔の部分に乗っかって、で——あうっ！わっ私があなたのお腹の方に——っ！！」

な、なるほどね。

どうやら本当に凄い事になっているようだ。

「だったら早く退いた方が……」

「それが出来たら 苦労は しないわよ！」

聖の声が心なしか熱っぽく感じる。

「こっ腰が抜けちゃって動けないの！」

「私も上に聖ちゃんが乗っかってるから、自分ではどうにも」

では一体どうしろと？

聖の回復を待つ余裕はない。

このままハーレム状態が続けば美琴ちゃんも多分保たない。

それ以前に、僕の理性の方が保ちそうにない。

このまま勢い任せに二人共頂きます、ってワケにもいかない。

……いつてどうする？

とにかくこうなったら最後の手段を使わざるえない。

「聖、美琴ちゃんゴメン！うおおりゃあ！」

僕は力任せに立ち上がった。

「きゃっ！」

「いったあゝ！」

「二人とも大丈夫？」

「だいじよば無い！」

「痛いですゝ」

「ご、ゴメン……」

見ると二人とも打ったであろう腰をさすっていた。

「もゝ拓真！女の子はデリケートなんだから、優しくしなさいよ！」

やっと解放された聖が文句を言う。

「確かにその通りだが……聖、お前さっきの状態であれ以上耐えられたか？」

「う……」

聖の顔がボツと赤くなるのがわかる。

「た、確かにあれ以上は私も聖ちゃんも保たなかったですね。」

特に聖ちゃんなんかもう少していつちゃ……」

「わあーわあーっ！！」

いきなり聖が美琴の口を抑え込んだ。

（……美琴ちゃん！ソレは言っちゃダメ！）

（えー？ダメですか？だって聖ちゃんあんなに気持ち良さそうに……）

……）

(――！とにかくダメー！)

だから、一体何が起こったのだろう？

(まあ、それを考えるのは後でいいか。それより)

右手に残された感触を名残惜しつつ、さっきの衝撃の事を考えた。ドンツと強い揺れがきたから、波に煽られたからじゃ無いと思う。後は何かにぶつかったか、逆回転かなんかで急停止したかの2つが思いつく。

前者に関しては船が大きいから流水にでも接触しないとあれほど揺れはしないと思う。

後者はそもそも理由がわからない。

第一こんな海のと真ん中でなぜ止まる必要がある？

と、なるとやはり前者の何かにぶつかったとみた方がいいかも知れない。

でも何が？

まさか鯨にでもぶつかったと？

あり得ないとも言えないが、確率が低すぎる。

仮に何もぶつかって無いとしたら まさか爆発？

「……まっ！拓真！聞いてるの！」

いきなり聖の顔がどアップで現れた。

「わっ！ なんだ聖か。驚かすなよ」

「別に驚かしてないわよ。ただ拓真がさっきからブツブツ一人で考え込んでるから呼んだだけよ」

「あっそう…で、要件は？」

「神城さん、とりあえずブリッジにでも行きませんか？何か判るかも知れませんか」

「…確かにそうだな」

と言うより当然の答えだった。

「本当に、拓真は考え込むと周りが見えなくなるって癖が直らないのよね」

「ほっとけ」

僕たちはとりあえずブリッジに向かうことにした。

「こちらです」

美琴の案内で、船の中をあちこち歩きまわってやっとたどり着いた。どうやら彼女自身もう覚えたらしい。

「コレを持っていて良かったよ」

僕が持っていた携帯ゲーム機に船内の地図をダウンロードしてあったから、それを元に記憶を辿ってもらったのだ。

このゲーム機は最新式の高性能ソフトを搭載していて、使いようによっては今みたいに外部からデータを取り込んで使うことが出来るのだ。

「アンタね、パーティーに行くときぐらい置いてきなさいよ……」
「いいだろ？役に立ったんだから」

ちなみにこのゲーム機、知り合いに頼んでちよつとしたスパコン並みになるよう改造してもらってあるのだ。知り合い曰く、《鯨が踏んでも大丈夫》らしい……。

どういう意味だかわからないが、すごいのは確かなようだ。

「あのーお二人さん、そろそろ入りませんか？」

見ると美琴が扉の前で困ったような笑みを浮かべていた。

「はい」

僕らの見事にハモった声が静かに通路に響いた。

「やっぱり仲が良いですね」

……どこをどう見ればそう見えるのだろうか？

なんにしても僕らは、ブリッジの扉にある端末で中に連絡を取った。対応は美琴がしてくれたから、割とスムーズに話がついた。

「……はい……はい、わかりました。ふう、神城さん聖ちゃん、どうやら中に入っても良いそうですよ」

「ホントか!？」

「ありがとー美琴ちゃん!」

「えへっどう致しまして」

これでやっと先程の衝撃のことがわかる。

そう思っていた僕の考えは少し甘かった。

「ええ！どういう事ですか！？」

この船の艦長と思われる人が僕の質問に答えてくれたが、その答えがこれだった。

「どうもこうも、原因がわからないんだよ。船内の全エリアを何度スキャンしてもどこにも損傷はないし、そんな報告は今の所きていない」

「レーダーはどうですか？」

「同じだ。衝撃の前後を合わせてレーダーに障害物らしい物はなにも写らなかった」

「そんな」

「つまり、船からしてみればあの衝撃は無かったと言うことだ。まったく、どうなってるんだ？」

（……絶対おかしい。この船にだって最新式のレーダーを積んでいるはずだ。レーダーにも写らず、物理的な損傷を与えないモノ……）

「あら、また思考モードに入っちゃったみたいね」

「あのー聖ちゃん。神城さんって昔からこうなっちゃうんですか？」

「ん、まあね。拓真は何か引つかかる事があるとああやって考え込んでんじやう、まあ癖みたいなものね」

「そうなんですか？」

「でもそれが、たまーに役に立つちゃったりするんだな、これが」

「たまに？」

美琴は拓真の方を見てみた。

拓真はまだブツブツと考え事をしていた。

（……突風なら いやいや風くらいじゃあんな振動は起こらない。なら海流に捕まった なワケないか）

「アイツが思考モードに入ると周りが見えなくなる代わりに、凄い勢いで頭の中をフル回転するの。で、そういう時に出た答えってのがけっこうトンデモないんだわ」

「トンデモない…ですか？」

「そう。学校の成績はあまり良くはないんだけどね、とにかくこういう時の頭の回転はすごく速いのよ。昔、近くの廃工場で二人で遊んでただけど、奥まで入りすぎて出られなくなったことがあったね…」

「まあ大変ですね」

聖はその頃の光景を思い浮かべていった。

「うん。そこは大人でもたどり着くには難しい場所だね、助けを呼んでも誰も来れない状況だったの」

「それでどうなったんですか？」

「私は不安で…寂しくなって…泣いてばかりだったけど、アイツ…拓真だけは違っていた。出れなくなつたと知ると、今みたいにブツブツ言いながら必死に出る方法を考えてくれたの。そのおかげで私たちは無事に出ることができたの」

「へえ…いい話ですね。なんか神城さんがカッコいいです」

「ん…まあね。確かにあの時はカッコいいな…って思ったけど、次の日はもういつもの拓真に戻っちゃったからね」

「……………なんか、羨ましいな」

「え？何かいった？」

「べつ別になんでも無いです！？」

「そう？」

二人で話に夢中になってると、何者かがブリッジにすごい勢いで飛び込んできた。

「美琴ー！大丈夫か！？」

入ってきたのはグレーのスーツ姿の青年のようだった。

細めのメガネに整った顔立ちで優しい感じがする。

なんとなく感じが美琴に似ている気がするけど、兄さんだろうか？

「お父様?!」

はい？

本日三度目のトンデモない言葉を聞いたような気がする。

「あつおじさん！お久しぶりです」

「おや？聖ちゃんじゃないか。久しぶりだね。ずいぶん綺麗になつて、見違えちゃったよ」

「やだ、おじさんったらお上手なんだから」

おいおい　なんで聖は普通に対応出来るんだ？

僕は呆然としたままでいると美琴のお兄：お父さんが声をかけてきた。

「やあ、拓真くんも久しぶりだね。元気にしてたかい？」

「ええ…まあ…」

なんか、さつき聖に話しかけた時より声が弾んでいるように聞こえるのは気のせいだろうか？

「これから我が娘を末永くよろしく頼むよ」

「はあ　末永く？」

「おつ、お父様！」

妙に引つかかる言い回しに違和感を感じる。

ついでになぜか美琴も顔を赤くしているように見える。

「さてさて、美琴に聖ちゃんに拓真くん。とりあえず今夜のところはみんな自分たちの部屋に戻っててくれないかな？」

「え？はい、わかりましたけど…お父様は？」

「私かい？私はこれから艦長さん達と先ほどの揺れの事で色々調べなければならぬからね。あーそうだ美琴、もしよかつたらこのまま自分の部屋に戻らずに、そのまま聖ちゃんたちのお部屋にお邪魔しちゃいなさい。久しぶりの再会だ、積もる話もあるだろう？」

「ええ…まあ」

葉一は美琴に近付いてそつと耳打ちした。

（それに、あの話も本人に直接伝えたほうがイロイロ都合がいいだろう？）

（……！！そつ、それはまあ…たしかに　）

なんだか、イヤな予感がしてならないのは気のせいだろうか？

僕はそんな事を感じつつ部屋に戻っていった。

たしかにこのままこの場所にいても事態は進展しないだろうし、ここは大人しく戻った方がいいと思ったのだ。

僕たちはゲーム機のナビを使って自分たちの部屋に戻り、とりあえず着替えることにした。

パーティーがどうなったかは分からないけど、何かあった時のために私服に着替えておくのは問題ないと思う。

で、部屋に戻ったのはいいが案の定、部屋から閉め出された。

（わかつてはいたが…本当に女の子の着替えて長いな）

戻る途中で美琴の部屋に寄って彼女の私服を取りに行ったが、僕はその量に絶句した。「そんなに要るの着替えて？」

持ってきたのは子供くらいなら2、3人入りそうなデカイスーツケースだった。

いくらなんでもそんなに必要ないと思うのだが…？

僕は部屋から聞こえてくる声にそっと耳を傾けた。

「わー、この服かわいい♪」

「よく似合ってますよ。コレなんかどうです？」

「うわー素敵な服ねー♪」

（オイオイ…何やってるんだ？お泊まり会じゃ無いんだぞ）

これでは何時までかかるかわかったものじゃない。

暫くしてドアが少し開いたと思ったら、自分の服とアリガタイ言葉が出てきた。

「拓真ー！ちよつと時間が掛かりそうだから先に着替えててね」

「……………お前らな」

もはや文句を言う気力も出ない。

「仕方ない。どこかで着替えるか」

何故に私服に着替えるのに自分の部屋ではなく、別の場所を捜さねばならんだ。それから待つこと一時間。

「すみません。もう入っても大丈夫ですよ」

美琴がドア越しに言ってきたのでやっと部屋に入ることができた。

「やれやれ…。ん？なんだずいぶん騒いでいたからてつきり着飾っているのかと思ったけど、普通の格好なんだな」

「えーとまあ最初はそのつもりだったんだけど、そんな事してるヒマはないなーって気が付いたワケで」

「聖はそう言いながら頬をポリポリかいた。」

「おおっ！よくぞ気が付いたな聖。少しは知性も上がってきたという事か。感心感心」

「なんですってー！！」

「おっと、つい本音がでちまった」

「がー！！！！」

襲いかかってきた聖を巧みに避けつつ美琴に近付いた。

「へー、やっぱりセンスいいな。よく似合ってるよ」

「あら、ありがとうございます」

「た〜く〜ま〜！なんで美琴ちゃんは誉めるのに私は何にもないのよっ！」

「誉めただろうが。それよりもグーは止める。痛いから」

「問答無用！」

「やれやれ…」

仕方ないので暫くの間、僕と聖の追いかけっこをする羽目になった。

「あの〜もう良いでしょうか？」

走りまわること10分、やっと聖がへばったのでそこで終了だった。

「はぁ はぁ 。なんで、アンタの方が先にへばらないのよ…」

「そりゃあ少しは鍛えられてるからな。主に爺ちゃんと聖に」

僕も少し息があがってるけど聖ほどじゃない。

「で、なに美琴ちゃん？」

振り向いて美琴に聞いてみた。

「あの…聖ちゃんもそのままで良いから聞いてくれますか？」

「なに？」

すると少し黙り込んで何かを決心するように言ってきた。

「実は、拓真さんが当てた特賞は偶然当てたのではないのです」

『はい?』

(…いまなんて言った?)

いきなりの事に言葉の意味がよく理解出来なかった。

よーするにコレは…。

「えーっと、つまり僕が当てたあのチケットは意図的に仕組まれていたと?」

美琴がコクリとうなずく。

「その事は私もあとでお父様から聞かされたのですが、私にも伏せておくぐらいのワケがあつたのです」

自分の娘にも伏せておいた理由か…。

僕はさっき感じたイヤな予感を思い出した。

「そのワケと言うのが……」

と、美琴は真剣な眼差しで僕の方を向いた。

「拓真さん!」

「はいっ!」

「ふつつか者ですが、よろしくお願いいたします!」

「はい?」

いきなり頭を深々と下げてくださいされたけど、なにがなんだかさッパリ理解出来なかった。

それに今の言いようはよくドラマなんかで聞く…。

「ちよっと待ってよ美琴ちゃん。その言い方はまるで新婚さんの…」

「はい。言葉の通りです」

ポツと顔を赤らめてうなずく美琴を半ば呆然と見つめる聖だった。

で、言われた本人はと言うと……。

「……………」

何を考えるでもなく、完全に頭の中が真っ白になっていた。

(えーっとつまり何だ?僕は告白されたのか?いや、これは告白通り越して既に婚約?久しぶりに会った幼なじみとイキナリ夫婦ですか?なんかイロイロ重要なことがすっぱ抜けている気がするけど、

そーいえばおじさんが仕組んでこの船に呼ばれたんだっけ？ってことは――)

もはや思考モードではなく、妄想モードにまで到達してしまった拓真は一人ブツブツと考え込んでしまった。

「拓真ー！おーい！　ダメだこりゃ。完全に向こう側に行っちゃった」

聖は一応声をかけてみたが、反応は変わらなかった。

「に……しても美琴ちゃん。今のはどういう意味で言ったの？」

「実は……拓真さんと呼んだのはお父様なんです」

「それは分かってる。問題はおじさんの目的が何なのかってこと」

「その目的なんですけど……、私との婚約なんです」

「はあ？なんでアイツなんかと……？だってアイツは――」

「わかってます。聖ちゃんが昔、拓真くんのお嫁さんになるって約束したことは」

「――なっ！あ……あれは……その――」

「でもそれ以外にも、拓真さんにはご両親が決めた許嫁がいたのです」

「い……許嫁　って美琴のこと？」

「はい。とはいっても私も拓真さんも知らされてなかったんですけどね」

聖はあまりの事に思考が追いつかなかった。

（アイツの許嫁って……でも美琴ちゃんだってアイツのことよく知らないのに……！――！）

そこで聖は気がついた。

今まで彼女がどこを見ていたのか……。

（そうだ……美琴ちゃんはずっと拓真をみていて……。まさか　美琴ちゃんも拓真のことを？）

聖はその事を美琴に聞こうとした瞬間、またさっきの揺れが襲ってきた。

『きゃあぁー！』

「うわあ！」

今度のはさっきのよりも数段上の振動だった。

拓真はこの揺れでやっと思考が現実の方に戻ってきた。

「い…今の揺れはあの時のと同じ…じゃない、もっと強く揺れた」

「拓真…やっと戻ったのね！」

「……まあね。どうやらゆっくりと考えさせてはくれないようだね」
(…私としては正氣に戻ってくれて良かった気がするけどね)

「なんか言ったか？」

「イヤイヤ別に何も言ってませんよ。うん」

「そうか？…まっいいか。それより二人とも、今ので揺れの正体が見えてきたぞ」

「え?! 本当に?」

「一体どういう事ですか?」

「この揺れは艦長さんの言うとおり物理的に起きた揺れじゃない。
たぶん、大気そのものが揺れたんだと思う」

「大気が? でも大気っていうとえーっと……」

「大気とは要するにこの空気のことを差すんだ」

そう言っただけの空間を両手で示した。

「空気…でも拓真さん、そんなのが揺れても大した事はないのでは?」

「ある条件が揃えば十分可能だよ。実際に僕らは揺れてても船自体は揺れてなかった。問題なのはどうして揺れたかだ」

「さっきの条件じゃないの?」「違うな。この揺れは僕の知っている条件とはどれも一致していない」

「ならどうして…?」

「それが判らない以上どうにもならないな…。とにかくもう一度ブリッジに行ってみよう。何かわかるかも知れない」

しばらく考え込んだ二人だが、とりあえず拓真の案に従うことにした。

「よし。じゃあ、とりあえず簡単な荷物だけ持っていこう。なにか

あると危ないからね」

「わかった。美琴ちゃんは何物どうするの？」

「私なら大丈夫です。ほら」

美琴はスーツケースの裏側を探ると中型のバックを取り出した。

「こんな事もあるのかと自分の荷物は持ってきておいたんです」

「あら…そう」

こんな事とはどんな事を想像していたんだろう？

まあ、そこは考えなくていいだろう。

しかし…、デカイスーツケースは伊達ではなかったな。

僕も自分のショルダーバックを持って部屋をでた。

「うわ…。凄いなこりゃ」

さっきの揺れのせいか通路は人でごった返していた。

やはり小規模であるがパニックが起きたらしい。

「これは迂回して行ったほうがいいな」

僕はナビで迂回路を搜してみた。

「あった。一旦デッキに出てから入れば大丈夫みたいだ」

僕らは人ごみを避けて外に出ることにした。

どこかで怒鳴り声が聞こえてくる。

「ふう。拓真の言うとおりに回り道して正解だったみたいね」「ま

あね。こんな状況じゃケンカの一つや二つ起きても不思議じゃない」

デッキへ出る扉を開けると辺りの光景に驚いた。

「うわぁー凄い霧ですね」

「夜だからかな？凄く濃い霧ね」

僕はこの霧に奇妙な違和感を感じた。

手のひらをかざしてみるとすぐに気付いた。

「あれ？この霧 湿り気がない」

「…え？あ、ホントだなんで？」

「……僕が知るかよ」

僕はなんとなく柵に近づいて海を覗いてみた。

「うーん、やっぱり夜の海はなんか不気味だな…」

「あれゝ拓真ゝ？もしかして怖いのか？」

「べつに。たとえ夜でも海は海だろ」

「私はべつに夜の海がコワゝいなんて言っていないけど？」

「……うつ」

聖が楽しそうにからかっている。

（に……しても本当に吸い込まれそうなの……）

そう思った瞬間、いきなり船が大きく傾いた。

それもこちら側に向かってだ。

「うわああっ！」

突然のことに柵を乗り越えて落ちしまう。

「拓真！？」

慌てて聖が覗いたが、既に拓真の姿は消えていた。

「拓真さん……」

「……そんな」

聖はその場にへたり込んでしまった。

「うそ……嘘よ……。拓真ゝ！」

「なんだよ」

「へ？」

突然どこからか拓真の声が返ってきた。

「下だよ下！」

聖と美琴はもう一度覗いてみた。

今度はもつと内側を集中して探す。

「いました！あそこです！」

見ると下のデッキの淵になんとかしがみついていた。

「……勝手に人を殺すな。と、言いたいが　二人とも、早くその場所から離れる！」

「え？どういう事……？」

「早くしろ！引きずり込まれるぞ！」

その時、聖たちの体がグンツと海の方に引っ張られた。

「……なっ！？」

「きゃあっ！」

二人はかろうじて柵に掴まると、なんとか堪える。

それでも自分たちを引っ張る謎の力はまだ続いていた。

「な…なにが起きてるのよ？」

「こつちが知りたいよ…。さっきもいきなり引っ張られたんだよ」

だが、拓真は周囲の状況が先程とは全く違っている事に気付いた。

「なんだ…？霧がさっきよりも濃くなつて…と言つかまとわり付いてくる…？」

まるで霧自身に意志があるように三人の周囲を包んでいった。

「何なのよコレは！気持ち悪いわね！」

聖は必死に振りほどこうともがいているが、全く効果がないようだ。

「こりゃ人の力じゃあ、どうにもなりそうに無いな」

拓真はチラッと上を覗いてみた。

さつきから聖の声はするが、美琴の声が聞こえない。

「…ありやま、気絶してるよ」

美琴は器用に柵にぶら下がる形で気絶していた。

などと言ってる間にすっかり謎の霧に僕らは覆われてしまった。

そして、それと同時に急速に意識が遠ざかっていく。

（…なんだ？急に眠気が…）

そのまま気を失うと僕は静かに深い霧の中に埋もれていってしまった。

僕らの記憶はここで途切れてしまう。

次に目が醒めた時には、僕が今まで見てきた 常識 を疑ってしまふような現実が広がっていたのだ。

僕が日頃慣れ親しんだゲームの中の 戦場 と、リアルの 戦場 と言ふ名の現実が…。

突然で不可解な女王さま

「拓真」

誰かが呼んでいる気がする…。

体が凄く重い…。

とても眠い…。

お休みなさいzzz…。

「おーい、寝ないで下さい」

「……ムニヤ…あと五分………」

「ダメだこりゃ」

目の前で何かの気配がする。

眠たいながらもぼんやりと前を見る。

滲んだ視界には人影が見えるが、辺りが暗いのとまだ焦点が定まっていなくてない事もあって誰かはわからない。

(…だれだ？聖じゃない。美琴…でもない)

次第に意識がはつきりしてくる。

それと同時に視界もクリアになっていった。

さつきはよく見えなかったが、今度ははつきりとその人物が見える。あと、目の前に巨大な風船のようなものが浮かんでいた。

「へ？風船？」

バンツと音を立てて風船が破裂した。

「うわわわっ」

僕は慌てて飛び起きる。

「ありゃ？起きてましたか」

いきなりの事に頭の回転がまだ追いついてきていない。

「な…なんだ今のは？いきなり風船が破裂して…　　って、あん

た誰だ？」

目の前の人影の正体はフードをかぶった男だった。

だが、見ると男の周りを幾重もの鎖で取り囲むように張り巡らせて

ある。

男の体にも同様に鎖が巻きついている。

フードの男が口を開く。

「ふふふ…まずは自己紹介といきたい所だが、少々時間が惜しいの
でね。単刀直入といこう。キミの力を貸してもらいたい」

「はあ？どういう事だ？」

「さっきも言ったように私には時間が惜しい。余計な詮索は無しに
して欲しい」

口調は落ち着いているが目が真剣だ。

ここは黙って従おう。

僕はゆっくり頷いた。

「いい判断だ。実はキミにある人物の助けになってほしいのだ」

「ある人物？」

「誰かは答えられない。だが、キミなら一目でわかる筈だ。そして、
その人物こそキミ達が元の世界へ帰る唯一の方法を知っている」

「なっ…！僕たちの事を知っているのか？」

「ああ勿論知っている。何故ならここに招待したのも私だからだ」
僕は改めて自分の周りを見渡した。

何もない真っ黒な空間があるだけだ。

唯一の物体だつて、フードの男の周りの鎖だけが見える物のみだ。
その鎖だつて途中から消えている。

まるで、この空間から生えているかのように見えた。

この場所はどう考えても僕の知っている場所ではない。

夢でももう少しマシなはずだ。

「理解出来たかな？」

「まあ、だいたいのは…。それより一つだけ質問してもいいか？」
「なんだい？」

「ここが僕らの知らない異空間だとして、僕の他に二人こっちに飛
ばされているはずだ。どこに居る？」

《キミ達》と確かにこのフードの男は言った。

今の状況が現実である以上には、僕一人が飛ばされたとは思えない。

必ず聖たちもこっちに来ているはずなのだ。

「心配しなくても彼女達もこちらの世界に来ているよ。ただ、君がいる時間とは少し外れた世界だけどね」

「時間のズレた世界だと？」

「ああ、この時間を基点に少し未来の世界だ」

「未来……」

と、すれば僕がこれから行く世界は聖たちから見れば過去の世界になる。つまり、僕の行動次第では……。

「彼女たちは危険にさらされる事になる。うん。やはり見込んだ通りだ。実に察しがいい」

人の心を勝手に読まないでほしい。

「さて、そろそろ時間が無くなってきたな。君に一つプレゼントがある。役に立つはずだ」

「プレゼント？」

「ああそうだ。私の片目を貸してあげよう」

「はい？」

自分の片目を貸してどうしようと言っのだろう。

「心配するな。片目と言ってもその能力を貸してやると言っているのだ」

そう言うのと男の体が淡く光り始めた。

「うわっ」

それと同時に自分の左目も熱くなってきた。

だけど異変はそれだけではなかった。

「あああ………」

次々に様々な情報が頭の中に流れ込んでくる。

「その目は マクベスの瞳 と呼ばれる魔眼だ。ありとあらゆる情報と様々な知識が封じ込められている………」と、言ったところで聞いてないか」

いや…聞こえていた。

だけど答えることが出来ないのだ。

意識をしっかりと保たないと壊れてしまいそうになる。

「手にした能力は君を裏切らない。生かすも殺すも己が次第だ」

急に辺りが白くなってきた。

同時に意識が遠のく。

「ふむ、どうやら時間のようだ。では頑張ったまえ」

「ま…まで」

「あ、そうそう。向こうに着いたらこの空間の記憶は封印しておくから。……ではサヨナラ」

男が見えなくなっていき、僕の意識もそこで途切れた。

「うっ…」

何やら周りが騒がしい。

「……？」

そっと目を開けてみる。

ドスッ！

いきなり目の前に棒のようなものが突き刺さった。

「うわ！」

慌てて飛び退くとその物体の正体がわかった。

「え？…これは……剣？なんでこんな物が降ってくるんだ？」

剣だけではなく、辺り一面に金属音と人々の罵声が飛び交っていた。

「おいおい、この場所ってまさか…」

そーっと後ろを振り向く。

そこにあるのは剣と人と……血。

その人達は各々が武器を持ち眼前の敵に襲いかかる。
そして築かれる死体の山。

「戦場だ…。しかも本物の斬り合いだ」

以前見た時代劇の殺陣を思い出す。

でも、あんなのは所詮偽物だ。

彼らは見せ物でやっているんじゃない。

相手を殺すために剣を振っているのだ。

「とりあえずここから離れた方がいいな。危険すぎる」

そう言つて視線を元に戻す。

「げ…」

戻した先には兵士達が待ち構えていた。

しかも僕を殺す気マンマンでいた。

「マズい……」

後退りするも後ろは戦場で逃げ場ナシ。

気が付いてわずか3分で絶体絶命。

同じ3分でもカップヌードルのずっとマシだ。

美味しい。

「くっ…いくら何でも僕だって死ぬ気はないぞ！」

意を決して僕は構える。

逃げ道はない。

かといって命乞いをしても意味がない。

戦うこと、そして勝つこと。

それしか生き残る道はないのだ。

兵士達もこちらの意図に気が付いたようだ。

構え直すと間合いをはかる。

（半端な技だと逆に危ない。一気に決める！）

「…ふっ！」

相手の一人に詰め寄ると拳を腹部に押し付ける。

「掌破　しょうは　っ！」

ドンツと音を立てて兵士が吹き飛ぶ。

中国武術の発剄の応用技だ。

詳しい説明は省くけど。

（次っ！）

振り降ろされた剣を避けると、背後に周り込む。

「双刺閃　そうしせん　！」

背中の中身の部分を狙って突きを当てる。

「がっ！」

背骨をずらされてそのまま崩れ落ちる。

（ラストだ！）

僕は残った最後の兵士を飛び越えるようにジャンプした。

そして空中で体制を変えると右足を振り降ろす。

「食らえ！墜迅脚　ついじんきやく　！」

兵士の頭部を垂直に蹴り飛ばす。

「ぐおっ」

そのまま地面に叩きつけられて気絶した。

「…ふうっ」

僕は着地すると一息ついた。

「とりあえず片付いたか。…ん？」

遠目に何かが見える。

鎧を身に付けてはいるが、あれは…。

「女の子だ……って、マズい！」

女の子は逃げている様だったが、すぐ後ろから兵士近づいてきた。

動きからみて彼女を狙っているようだ。

「くそっ！ここからじゃ間に合わない」

相手との距離を考えても助けに入るには遠すぎる。

その時、足元に何かが当たった。

見てみるとそこにあっただのは一振りの剣だった。

大方、さっきの兵士の一人が落としたのだろう。

「剣……！そうだ！」

僕は素早く剣を拾うと槍投げのように構えた。

（チャンスは一度だけ！……！？）

不意に左目が熱くなる。

それと同時に対象との正確な距離が頭の中に流れ込んでくる。

（距離21M…風は追い風……いける！）

「うおりやああ！」

僕は思いっきり剣を投げた。

剣は勢いよく飛んでいき、ちょうど切りかかるうと振り上げた相手の剣に激突した。

バキィ！

派手な音で剣が砕け散る音が響く。

「くっ…」兵士は別の短剣を取りだそうとしたが、そのタイムラグが仇となった。

自分が追いかけていた女の子から足払いをかけられ、追い付いた僕の拳が顔面に叩き込まれる。

さらにオマケとばかりに、倒れ込む兵士に向かって金的を喰らわす。兵士はぐうの音も出せずに悶絶する。

「南無…」

とりあえず合掌してから女の子の方に向き直る。

「大丈夫？」

女の子は膝をついたまま肩で息を吐いていた。

そして、じつと僕の方を見つめていた。

（……なんか、つい最近にも同じ反応する娘がいたよ…な気がする）
いや…もちろん同じ訳がない。

……ない、ハズだ。

………たぶん。

「お前！」

「はっはい！何でしょうか？」

「いい腕だな。どこの騎士隊の所属だ？」

「騎士隊？…え」と、別にドコにも所属してないと言っかなんというか……」

「な……！その腕でフリーだと言うのか！？」

（なんなんだ？この娘は？）

助けた少女のいきなりの質問にたじろいでしまう。ただ、女の子の目はキラキラと輝いて見える。完全に、なにかを期待している目にしか見えない。

（うう……スゴく厄介な事になりそうな予感）

この場にはいない一人の幼なじみと同等のオーラを発する女の子に、一抹ならぬ不安を覚えてしまう。

「しかし……お主。もしかガルドア帝国の者か？」

「ガルドア帝国？」

僕がそう呟くと、また左目が熱くなる。

今度は ガルドア帝国 に関する情報が流れ込んでくる。

「えーっと、たしかマクル王亡き後息子のクスィー皇子が継いで、その関係で国内が穏健派と武力派に別れてエライ事になっている国のことだよな？」

「うむ……まあ……その通りではあるのだが……」

急に困った顔になりながら、頬をポリポリと掻く。

「お主……妙々に詳しいの。一体何者じゃ？」

「さあ……誰なんでしょう？」

それはこっちが聞きたい。

さっきから何かのキーワードらしい言葉を聴くと左目が反応して、その事柄に関する情報が流れ込んでくるのだ。

最初に目を覚ました時も何故か左目が疼いたし、さっき剣を投げたときも相手との距離や投げる角度、風向きと風力まで頭に流れ込んできていた。

まるでパソコンが必要なデータを読み込むみたいに、不自然な位に正確な情報が知識として脳内にインプットされていく。

で、極めつけが今の他国の情報だ。

行ったことも無いし、調べた事も無い。

オマケに今時、剣と剣で戦う戦争なんてあり得ない。

いつたい何時の時代の戦争だ？

「……………主。おい！聞こえておるのか！？」

「え？」

気が付くとさっきの娘がすぐ目の前まで顔を近づけていた。

「わわっ！」

「驚くのは私の方だ。いきなり黙り込んだと思ったら、ブツブツと……。何かの病気かと思ったぞ」

「ああ、ゴメン。今は癖みたいなもなんだ」

……しまった。

また思考モードに入っていたらしい。

「して、どうやらガルドアの手の者では無さそうだし、少々アレだが頭もよく回りそうだな。そこでだ。一つ私に協力してはくれぬか？」

アレって。

まあ……自覚してないわけでは無いから別にいいけどね。

「協力って？」

「うむ。お主、この戦況をどう見る？」

女の子はそう言って戦場を見渡した。

また左目が熱くなる。

今度は兵士たちの敵味方の区別が付くようになった。

「うーん、味方がやや押され気味かな？」

ざっと見た感じ少し劣勢のようだった。

「私はこの戦況をひっくり返したい。どうすれば良いと思う？」

「この戦の目的は？」

さすがに敵味方はわかってても、目的がわからなければどう仕様もない。

「私の目的はこの追っ手共を振り切りたい」

「なる程ね。逃亡戦ってどこか」

「……………まあ、そんなとこだ」

「うーん」

僕は辺りを見回す。

確かに味方は後方の部隊の盾になる形で展開している。でも敵の方が勢いついているから少し苦戦気味だ。

このままなら力押しで押し切られるのも時間の問題だろう。

「ん？」

僕は自分の足元の雑草が目についた。

瞬時にその雑草のデータが頭に送られてくる。

「これは……リスル草だな。燻して虫退治に使われるが……そうだ！」
草を見てこの戦況を打破できるアイデアが浮かんだ。

「ねえ君さ、この軍の司令官って知ってる？」

「司令官？」

「うん。その人に伝えて欲しいんだ」

「その必要はない。私に言えば済むことだ」

「そうか？じゃあ後方の兵士達にリスル草を可能な限り集めて欲しいんだ。あと、焚き火の用意もあの辺りにしておいて」

「わかった。あとは？」

「前線の兵士達にもう少し敵の足止めをさせといて」

「よし、早速作戦開始だ」

「あと最後に」

「ん？」

「弓兵を風上にスタンバイできる？」

「弓兵を？」

「うん。合図と一緒に敵軍に矢の雨をバラ撒いてほしい。同時に前線を一斉に後退させる。」

「それで全部か？」

「それで全部」

「では私も一つ聞きたい。焚き火と雑草でどうしようと言うのだ？」

「焚き火に雑草をくべて燃やすんだよ」

「それだけか？」

「そう。それだけで十分。あとは見てのお楽しみ」

それだけ言つと風向きを指で確かめる。

風はこちらから敵陣へと吹いている。

（これなら上手くはずだ）

「…ではゆくぞ」

女の子は祈るような形で手を合わせると呪文のようなものを唱えた。同時に体全体が淡く光り始めた。

しばらくそのままの状態が続き、5分程で元に戻った。

「全兵士に伝え終わったぞ」

「今のか？」

「そうだ。周りを見てみる」

僕はキョロキョロと辺りを見回す。

見ると兵士達指示通りに動いているのがわかる。

「…すごい」

推測だけど今のはテレパシーみたいなものだったのだろう。

「さて、次はお主の番だ。どのタイミングで合図をする？」

僕は敵軍の動きを見た。先ほどとあんまり変化はない。

「おや？」

弓兵達の方から狼煙が上がる。

どうやら準備完了の合図のようだ。

焚き火の方もすでに火がはいっている。

「よし」

地面に転がっていた自分のナップサックを持ち上げた。

「たしかこの辺に……あ、あつたあつた」

中から小さい小箱を取り出した。

中身は小さい紙筒がいくつもならび、導火線が取り付けられている。そう、取り出したのは爆釣だったのだ。

なんで持っていたのかは謎にしておこう。

…と言うか、聞かないで欲しい。

こいつを落ちていた槍にくくりつける。

慎重にタイミングをはかる。

「爆発音がしたらそれが合図だ」

女の子にそう答える。

焚き火からモクモクと煙が噴き出していく。

「いまだ！」

導火線に火を着けて槍を思いっきり敵陣に投げ込む。

パンッパンッパンッ！

爆釣が派手に破裂する音が響く。

それを合図に前線の部隊が下がる。

おかげで爆発音に気をとられていた敵軍は突然のこちらの後退に、僅かながら追撃が遅れてしまう。

そこにリスル草入りの煙が流れ込んできた。

「なっなんだ！？ゲホッゲホッ！」

虫退治に用いられるリスル草は、燻せば強力な催涙ガスになる。

目と喉をやられて動きが止まったところに、スタンバイしていた弓兵たちの矢が大量に降り注ぐ。

「うわわわっ！」

視界が悪いため命中率は低かったが、そこは数撃ちや当たるということでクリアした。

何はともあれ、視界ゼロの状態での遠距離攻撃を受けたとあつては追撃などできる訳がない。

しかも、涙ボロボロでくしゃみ連発では戦うどころの問題じゃなく、剣や槍を杖代わりにしてヒィヒィ言いながら逃げていく。

その間にこちらでも撤退の準備を済ませてサッサと逃げだす。

僕も彼らと一緒に逃げる事にした。

…なんで一緒かと言うと、最初は僕は騒ぎに乗じて一人で逃げようとしたが襟首を彼女にガシッと掴まれてしまう。

「ひっ！」

「どこに行く気なのだ？お主」

「い…いや」作戦も成功した事だし、僕はこの辺で失礼しようかな
くと思つて…」

「で？」

「いや…その…スミマセン」

僕の襟首を掴む彼女の手は小さくて綺麗な手だったんだけど……その力というか迫力というか、とにかく目に見えぬプレッシャーに負けて黙り込んでしまう。

「さあ、逃げるぞ。一緒に来い」

そのまま僕を引きずっていく。

まさに有無を言わさずと言ったところだ。

逆らえばコロス

口では無く目がそう言っている気がするのは気のせいでは無い。

……たぶん。

「？」

撤退していた本隊と合流した僕はなぜか兵士の皆さんから胴上げをされていた。

「……なんで？」

なんとか解放されたが、どうやら生き延びたお祝いに宴会が行われているようだ。

僕はそのまま酒盛りに付き合わされた。

「おいおい、ずいぶんと謙虚な軍師様だな」

「軍師様？僕が？」

「おう！姫さまが言ってた臨時の凄腕軍師様ってのは坊主のことだろう？」

「……えーっと、姫さまって僕と一緒に来た女の子の事だね？」

「おう！」

「姫さま？」

「おう！我らが姫君のミスティーナ姫さまよ！」

「おいガンス！今は姫さまじゃなくて女王陛下だろ？」

今僕と一緒に飲んでいた兵士とは別の兵士が間に割ってきた。

「良いじゃねえかレグ。今も昔も俺たちには大切な姫さまなんだからよ！」

「……たつく、お気楽者が。今と昔じゃ抱えてるモノの重さが違うっての」

「違わねーさ。たとえどんなモノを背負っていても俺たちは同じ主を守り通す。それだけだ」

「……だな」

どうも僕は蚊帳の外扱いになつたらしい。

ちょうど良いのでここらでお暇させてもらつ事にしよう。

「ガンスさんレグさん失礼しまーす」

小声で言つとそろゝとこの場を離れる。

「……ふう。やっと一人になれた」

人混みを避けて歩いていたら、いつの間にか静かな林の中に迷い込んだ。

とはいえ、辺りを見回せばすぐに宴会が行われている野営陣が目につく。篝火の灯りと笑い声でよく目立つ。

僕はここらで腰を下ろした。

ちなみに、あのお姫様らしい女の子は到着と同時に別れた。何やら忙しいらしく、いそいそとどこかへ行ってしまった。

まあ、その直後に僕は胴上げ隊（？）に拉致されたのだけども、ふと空を見上げるとそこには満天の星の海が広がっていた。

「良い夜空だよな……」

夜空を見上げながら一人呟く。

「いったいここは何処なんだろ。パーティーに向かったら謎の揺れに襲われて、なにかに海へ引きずり込まれたと思ったら変な霧に包まれて……で、気が付いたらこんな場所にいるし」

「ほう。ずいぶんと大変な目にあつて来たのだな？」

「ほんとにビックリする位にね ん？」

「……今、僕は誰に答えたんだ？」

確か僕の周りには誰もいない筈では無かったか？

いや、そもそも今の声には聞き覚えがあるような気がする……。

僕は声のする方に首を回してみた。

ギギギ……。

しかし、その動きは油が切れた歯車のようなゆっくりとした動きだった。

（まさか…そんなバカな事があるはずは………）

「ふっ」

いきなり僕の耳元に息が吹きかけられた。

「うひゃあああ!？」

心臓がひっくり返るような気がした。

と、というか変な叫び声をあげてその場でひっくり返った。

…… あゝ驚いた。

「ふふふ…… なにもそこまで驚く事はなかるう？」

「あんな事されれば、フツーに驚くわ！」

振り向けばあの娘…… ミスティーナが片手で口元を隠しながら笑っていた。

（…… 完全に遊ばれてるな）

体を起こしながらそう思った。

「どうしてココがわかったんだ？」

「なに、ちょうど林の方に歩いていくのが見えたものでな」

「… あっそう」

運悪く目撃されていたらしい。

「で？ どうかしたの？」

「うむ。お主に聞きたい事と相談があつてな」

「相談？」

「まあ、相談は後でもいいのだ。いくつか質問したい事があつて来たのだ」

「……別にいいけど、なに？」

質問ならこつちも結構あるのだが、まあそれも後で良いだろう。

「では、まず一つ目。名はなんと言つ？」

僕はすっこけた。

(……そういえば、まだ自己紹介もして無かったな…僕ら)

「えーと、今更だけど僕の名前は神城拓真。君は？」

「私か？私はミステイナ・フォン・シルフィス。しかし、カミシロ・タクマが不思議な名前だな」

「まあ、国が違えばそうだろうね」

「ふむ。で、カミシロはこの国の生まれだ？」

「拓真でいいよ。国は……日本って国だけど…知ってる？」

「ニホン……いや、聞いたことは無いな。それでタクマ、お主は何故あそこにいたのだ？」

「目が覚めたらそこにいた。その前はさっきも言った通り旅行で客船に乗っていたんだ」

「そうか…。では、タクマのその左目はなんだ？」

「左目！？」

僕はとつさに自分の左目を押さえた。

「ちよつとよく見せろ」

ミステイナが顔を近づけてくる。

(うわ……)

吐息を感じるまでに接近してきたミステイナに僕の心臓がドクンツと跳ねた。

彼女の髪がそつと肌に触れる。

肩に届くかどうかの長さのサラサラな髪がなんともくすぐたい。

こうして見れば彼女もかなり可愛らしい容姿をしている。

くるくるとよく動く大きな瞳は海のような深い青色をしている。僕

より少し背が低くてもバランスのとれた体型だ。

まあ、僕も背は高い方じゃないけど平均的なくらいだ。

「む。タクマ、その左目は生まれつきの物か？」

「はい？」

彼女は手鏡を取り出して顔を写してくれた。

「うわ…凄いな」

見ると自分の左目が鮮やかな緑色に変わっていたのだ。

一応右目も見てみるがこちらは普通の黒い瞳があるだけだった。

「なんだろう？」

「自分の事なのにわからんのか？」

「うん」

確かに左目の変色はわからないが、なにも思い浮かばない訳ではない。

さつきから繰り返し起こる左目の変調がこの現象と無関係とは思えなかった。

「ふーむ、タクマが知らぬとなればこの目は我が国の伝説に似ているな」

「伝説って？」

「うむ。確か万物の知識が納められた魔眼で……その名前がえーっと……」

《その目は マクベスの瞳 と呼ばれる魔眼だ。ありとあらゆる情報と様々な知識が封じ込められている》

(……?)

いきなり誰かの言葉が頭の中に浮かんできた。

しかしそれはさっきまでのように情報が流れ込んでくるのでは無く、自分の記憶から呼び覚まされた言葉だった。

この言葉はつい最近どこかで聞いたものだ。

(……でも僕は一体いつ、どこで、誰にこの言葉を聞いたんだ?)

「うーん。なんだっけ？ マック？ マクド？ の瞳だっけ？」

まだ彼女は彼女で必死に思い出そうとしていた。

しかし……出てくる名前が有名なファーストフード店を連想してしまふのは僕だけか？

「マクベスの瞳……」

僕はボソツと言ってみた。

「……そう、それよ！で、なんでそれを持っているのだ？」

「さあ？それがサッパリわからないんだよ」

「むゝ…まっいいか」

「いいのかよ!？」

僕は思わずツツコミをいれた。

「いいのよ別に。それに質問はオマケみたいな物だし、メインは別にあるから」

なぜかいきなり口調が変わったので驚いた。

さっきまで妙な時代口調で喋っていたのが、普通の女の子の口調に様変わりしていたのだ。

「……あれ？なんで喋り方が変わるの？」

「え？あー、あれはなんと言うか……あんな言い方でもしないと威厳みたいなのが感じられないでしょ？」

「……威厳ねえ」

ふと考えてみる。

確かに今の口調だと女王としての威厳みたいのは感じにくいが、さっきの口調も妙に背伸びしているみたいでどこか変だ。

「無理することは無いんじゃないかな？」

「…そう思う？」

僕は素直に頷く。

「で、ミステイナ。君の言ったメインって相談のこと？」

「あ、私の事はティナでいいわよ」

「わかった。それで相談って？」

「うん、実は……」

と、ここでティナは僕の両手をガシツと掴んだ。

「ねえタクマ。私の国に来てくれない？」

「はあ？」

思わず素っ頓狂な声を出してしまった。

「さっきの戦のお礼もしたいし、タクマの力を私に貸して欲しいの!」

「いや、貸してって言われても……」

「……ダメ？」

ティナは顔を近づけると潤んだ瞳で見つめてきた。
なんか……スッゴク畏クサイ。

こういう時の女の子の涙は二種類ある。
すなわち本物の涙か、泣き落とし用のどちらかだ。
前者ならかなりマズいが、後者の場合でも相当困る。

(……まあ、所詮は男なんだよな僕も)

こうなつては選ぶ道は2つ。

突っぱねるか、妥協するか。

「……わかった。協力するよ」

僕はあっさりと妥協した。

故人曰わく 女の涙ほど怖いものは存在しない だそうだ。

僕自身、ある一人の幼なじみで身にしてみて理解している。

(やっぱりこの娘、聖によく似てるな……)

「くっ……もう限界だ……」

いきなりドツと睡魔が襲ってきた。

客船の時の騒動と昼間の疲労で意識が急速に遠ざかっていく。

記憶が正しければほぼ2日間寝てない事になる。

いい加減体が限界だった。

「きやつ！」

そのまま僕は彼女に寄りかかるように倒れ込んだ。

女の子特有の柔らかい匂いに包まれながら、ティナの胸の中でスウ
スウと寝息を立てて眠りに落ちた。

「……おやすみなさい。タクマ」

ティナは拒むことなく、そっと拓真の頭を撫でてやった。

まるで遊び疲れた子供を見るかのような優しい微笑みと共にティナ
も拓真を抱いたまま眠りについた。

強気で理不尽な將軍さま

「おースゴいな……」

あの戦から三日後、ティナの率いる本隊は無事シルフィス王国に到着した。

とはいえ、同じ3日間でも僕にとっては見るもの全てが珍しいことばかりであった。

「やっぱり、この世界は地球じゃないな」

今更ながらポツリと呟く。

あの夜から感じてはいたのだ。

初めて見る知らない土地に聞いたことも無い国、ついでにマンガでしか見たこともなかった魔法の数々。

いくつかは マクベスの瞳 による知識で理解できたが、実はこの魔眼もあまり当てにならないことが判明した。

一言でいえばムラが多すぎるのだ。

例えば以前 ガルドア帝国 の国王の名前を言い当てた事があるけど、わかつたのは名前だけ。

その人物の顔はおろか姿形だって何もわからない。

これじゃ百科事典でも開いて見ているのと大して変わらない。

さらに、この世界には地球では架空の生物と呼ばれた生き物も結構いたのだ。

「よう。新米軍師さま。どうした？ ぼーっとしちまつてるぜ？」

僕の後ろから声をかけられた。

（うー、またこの ひと か……）

ぎこちなく後ろを振り向く。

僕よりずいぶん背が高い鎧姿の戦士が立っていた。

鎧と言っても胸当てや膝当てなどの部分的な箇所しか着けてはいないが、セルアーマー と言っらしい。

だが、そんなのは全然問題じゃない。むしろ問題なのは着ている本

人の方だ。

背は大体2M弱くらいで髪の色は深い緑色。肌はウロコで覆われていて口からは牙が見え隠れしている。

ついでとばかりに背中にはコウモリのような羽が生えていた。

ぶっちゃけて言えば ドラゴン だ。

彼は自分のことを 竜人族 と言うそうだが、僕からすればどっちだって構わない。

ちなみに名前はジオフォーラム。

みんなは ジオ と呼んでいるそうだ。

「いや……この世界に来たのが、まるで夢の中にもいるような気になったもんだから……つい……ね？」

「グワハハハッ！おいおい、寝てないワケじゃないんだろ？だったらこれは紛れもない現実だ。細かい事は気にするな！」

むしろこの光景が悪夢と考えた方が現実らしく思えるが、それこそ幻想というものだろう。

それに、人間ではないのは彼だけじゃない。

「ジオ！そんなにイジメたら軍師ちゃんが可哀相でしょ！」

今度はジオの横から手が伸びてきた。

その手はジオのとがった耳を掴むとグイグイと引っ張った。

「痛てててっ！おいキャニー引っ張るな！耳が取れるって！」

「やかましい！大体そのくらいで干切れるようなヤワな耳か！？」

「痛い！痛いからヤメロー！」

いきなりジオの耳を引っ張ったのは 獣人族 のキャニーと言う女戦士だった。

背は僕とくらいで明るいオレンジ色のショートヘアにピンツと飛び出した猫みたいな耳が特徴だ。

お尻に同じ色の尻尾も生えているが、先っぽが少し白くなっている。顔つきはジオと違い人の顔になっているが、彼女によればジオもその気になれば同じことが出来るらしい。

うーむ、さすが魔法世界。便利に出来ている。

（しかし…この娘場合は本物のネコミミ少女になるな。秋葉原に連れていけばスゴい事になりそうだな）

「痛い痛い！取れる！耳がとれるー！」

「とれるかー！！」

スポッ！

突然掴んでいた耳がすっぱ抜けた。

「へ？スポッって……………えええっつー！耳が取れちゃったああ！」

キャニーが掴んでいた耳をブンブン振りまわす。

「キャー！キャー！なんで？！どうしてえー？？！」

相当パニックを起こしてアチコチ走り回ったり、ジオの耳を元の位置にくつつけてみようとしてテープのような物で巻いてみたりと大騒ぎになった。

でも、落ち着いて見ればその必要は全然なかった。

何故ならジオの耳はちゃんと二つともついているからだ。

そもそも最初っから耳なんか取れてはいない。

僕にはその理由がわかった。ようは小学生のイタズラだ。

「……………ジオさん。あの耳って、ニセモノでしょ？」

「おう。よくわかったな。本物ソックリに作るのは苦労したぜ。なにせ質感まで似せたからな」

（……………つとに悪ガキだなこの人は）

ジオはアウアウ言いながら狼狽えているキャニーを面白そうに眺めていた。

すでに彼女は半分涙目になっていて、目元にこぼれそうなくらい涙が溜まっている。

そろそろ限界だろうと僕が近づこうとしたら、ピタツと動きが止まった。

さすがに何かヘンだと感づいたのだろう。持っていた耳をじーつと睨みつけた。

「……………そろそろヤバいかな？今の内に逃げ……………」

「どこへ行くつもりだい？ジオフォーラム殿？」

ピシッ！

突如、この場の空気が凍りつくような殺気が包み込んだ。
出どころはキャニーからだ。

そして向けられた先はジオのようだ。

ジオはこっそり逃げようとした体勢のまま固まっていた。

器用に首だけをキャニーに向ける。

「い……いや、俺、急な用事があったのを……思い出し……て……

……さ……あ……」

みるみるうちにその表情が青ざめていく。

その目に写ったのはキャニーだった。

いや………鬼　キャニーだった。

彼女から溢れ出るオーラは怒りと恥辱心を極限にまで高めた純粋な
殺意のオーラになっていた。

「キャ………キャニー？」

ジオは震える声を抑えながら聞いた。

「ジューオ」なにか言い残したい事はある？あっても聞いてあげない
けど、どうする？」

………笑っていた。

その笑みはドラゴンですら恐怖で動けなくなる程の満面の笑顔であ
った。

まあ、元はといえばジオのイタズラのせいなのだから自業自得と言
えるだろう。

「知らないっ」と

僕は耳を塞いでこの場から遠ざかる。

他の兵士たちも同じように逃げていった。

「まっ待て！ここは双方の話し合いと和解の道を………！！」

「問答無用！往生際せいやー！！」

「……ぎゃー！！」天高く、一匹の愚かなドラゴンの悲鳴が辺りに
響き渡った。

「なむむ」

僕はどこかの星になったであろうジオの魂に冥福を祈りつつ合掌した。

「……………かつてに殺すな」

「あ、生きてた」

戻ってきたジオは半分ボロキレ状態になりながらもなんとか二本足で立っていた。

「タフだね」

「当たり前……………だ」

が、それだけ言って力尽きて気絶した。

ために近くに落ちていた木の枝で突っついてみた。反応は無し。さすがのドラゴンも乙女の怒りにはかなわなかったらしい。

（どうしようコレ……？）

僕は悩んでいると兵士たちが荷車を持ってきて、ジオをその上に放り込む。

荷車を持ってきたのはガンスとレグさんの二人であった。

「まったく隊長も懲りないよなレグ？」

「ああ。副長を怒らせたらかうなるって知っててやるんだから始末が悪い」

「同感だ。もう少し総隊長の自覚を持ってほしいぜ」

二人はブツブツ言いながらジオを運んでいった。

「ジオって総隊長だったのか……………」

今わかった事だけど、どうやらこの部隊はティナを中心にジオが統括&指揮をしているようだ。

それに今のやりとりからさっきのは日常茶飯事らしかった。

「まったく、アイツは懲りるってことを知らないんだから」

後ろをみるとキャニーがむくれ顔で立っていた。

多少は気が晴れたらしくピリピリした殺気も消えている。

「あの〜キャニーさん。さっきの事なんですけど……………」

「あら、軍師ちゃん呼び捨てでいいわよ。それにアレはいつもの事だから気にしないでいいから」

「いえ……そつちじゃなくて、その呼び名です」

「呼び名？……もしかして恥ずかしかった？」

「………はい。けっこう恥ずかしいです。それに僕の名前は神城拓真です」

「あはは……やっぱり？じゃあタクマって呼べば良いかな？」

「はい。ぜひそう呼んで下さい」

「うん。そうする」

さすがに１７歳になってもちゃん付けは勘弁してほしい。

「タクマ〜」

誰かが僕を呼ぶ声が聞こえてきた。

この声は……。

「あ、ティナちゃん」

「ティナだ……」

ん？

キヤニーから妙な声が聞こえてきたが………？

「あれ？キヤニー姉さんも一緒だったの？」

「……え？姉さん？」

「まあ、姉といっても血はつながって無いけどね」

「私たちは昔一緒に遊んだ仲なのよ」

「なる程……幼なじみね」

うーん、この世界にもいるんだな。幼なじみってのは万国共通らしい。

「で？ティナはタクマになんか用があるとか？」

「うん、そうなんだけど………さっきジオさんが運ばれていったけど、なんかあったの？」

「え？いや……まあ色々ね」

僕もここは知らん顔をしておいた。

余計なうらみは買わないに越したことはない。

「またやったの？」

「あははは………うん。実はそうなんだ」

……言わなくても知られてるし。

(……本当に昔から日常茶飯事だったんだな)

さすがに少し呆れた。

「それはともかく……タクマ」

「はい？」

「そろそろお城が見えてくる頃だけど、タクマが異世界から来たことは隠しておいた方がいいと思うんだけど……それで大丈夫？」

「うーん」

あれからティナには僕の事情を思い出せる限りを話した。

しかし話していて思ったが、僕自身の記憶の中に抜けている記憶がいくつもあった。

それも、この世界に来る前後のことだけが抜けている。

そりゃ霧の中で意識をなくしていった時や、戦場で気が付いた時の記憶はぼやけていたけど……なぜ僕はこの世界が地球じゃないことを知っていたのだろう。

普通は別の場所にいきなり立っていたら異世界ではなくて別の国と考えるのが当たり前ではないのか？

そんな疑問が頭をよぎった。

(あの覚えのない言葉も気になるし……)

「わかった。確かにその方が面倒がなくていいだろうしな」

当面の間は マクベスの瞳 による情報でなんとかなるだろう。

異世界人とヘタに説明するより色々と都合が付きやすい。

「よし。それじゃあ早く出発するわよ！ここからなら夕刻までには城に戻るわ」

「ジオはどうする？さっきので気絶してるけど」

「それなら後続の連中に荷物と一緒に運んでもらうから大丈夫よ」

……ヒドい扱いだな。

それからしばらく進むと遠目に白い塔のようなものが見えてきた。
「やつと着いた……」

その塔を見てティナが呟く。

「あの塔はなに？」

僕はキヤニーに聞いてみた。

「……まさか、あれが城だとは言わないかな？」

「あれは結界塔よ」

「結界塔？」

「そう、あの塔はお城を囲むように他の場所にも建ってるの。で、それぞれが魔法によって結界を形成している特別な塔なの」

「……囲むようにって事は、その結界はラインを組むことでさらに強力になるってことか」

「正確」

やっぱり魔法技術はすごい。

実際の方がゲームよりも実用的に使ってるな。

さらに進んで行くと大きな城と街が見えてきた。

「見えてきたわ。あの城が私たちの居城の ストライフ城 よ」

「ほ……」

近づいて行くことにその大きさに圧倒される。

だけど、本当に圧倒されたのはその後のことだ。

「うわ……」

ティナたち本隊が城下町に到着すると、割れんばかりの歓声とパレードのような騒ぎが広がっていた。

「セリルの奴……連絡が届いたと知るや否や、城の連中総出でお祭り騒ぎにしちまったみたいだな」

「うわっ！」

いつの間にか復活していたジオが僕の隣に立っていた。

「あゝ驚いた」

「お前な……なに幽霊を見たような驚きかたしてるんだよ？」

「よく言うわよ。半分幽霊みたいなもんじゃない。あーしぶといっ

たら」

キャニーも呆れ顔でジオを見る。

「なんであれだけ痛めつけといて数時間で復活してるワケ？オークだつて一週間は寝込んでるわよ」

「ふんっ！俺は鍛え方が違うんだよ」

ジオは胸を張ってドンツと構えた。

（ふん……鍛え方がねえ）

僕はツンツンとジオの背中をつつついた。

「● □ ！！」

声にならない悲鳴をあげて立ったまま悶絶する。

それを見たキャニーは大爆笑。

「アハハハ！ただのやせ我慢じゃん。見栄張りすぎだよジオ！……
……ジオ？おい」

返事がない。

近づいてジオの顔の前で手をヒラヒラと振ってみるが反応なし。

「立ったまま気絶してるみたい」

見事なまでの大往生だった。

それも自慢できない大往生である。

「どうしようかコレ？」

試しにキャニーに聞いてみる。

「ほっとけば？」

即答だった。

（……………哀れな）

「とにかく兵も休ませたいし、早く城に行きましょう」

「うん……うん」

ティナに促されて僕たちも城に向かった。

ちなみにキャニーの言った通りにジオはあの状態のまま置いてきた。

ああ……後で恨まれそうだな。

僕はティナたちと共に城に入った後、僕だけ別室に通された。

「いや、まあわかつてはいたけどね……でもこの扱いはなんでしょう？」

今いる部屋はおそらく来客用の客室なのだろうが、とにかく豪華だなにが高級品かはわからないが、全然嫌みと感じさせないすつきりとした豪華さだ。

それにしても、このいきなりのVIPを想わせる待遇のよさはどういう意味があるのだろうか？

そりや待遇がいいのに越したことはない。

城に来た早々に牢獄入り……なんて事は勘弁してほしい。

「でもこの格好は無いだろう？」

僕は自分の姿を鏡で見てみた。

そこにいたのはスーツみたいな軍服らしき服を着た自分だった。

それもただの軍服ではなく、どこかの司令官のようなデザインになっている。

この部屋に来て早々に着替えさせられたのだ。

……………目を閉じればさっきまでの悪夢が蘇ってくる。

……………。

「こちらでお待ち下さい」

そう言っ僕を案内してくれたメイドさんは部屋から去っていった。

僕は彼女に礼を言っってから一息ついた。

「ふう。何はともあれやつと落ち着いて休めるな」

こちらの世界にやって来てからなかなかそうした機会がめぐって来なかったたので、呼び出しがあるまで一人ゆっくり出来ると思ったのだ。

コンコン。

「ん？」

「失礼します」

ノックの音がしたので振り返ってみると、さっきのメイドさんに同

じ服を着たメイドさん多数が入ってきた。

「カミシ口様、さっそくですがお召しの物を着替えさせてもらいます」

「はい？」

「ミステイナ様からのご要望ですのであしからず」

そっとうと僕の両脇をメイドさん達が掴み上げてどこかへ引っ張っていく。

「え？あつ、ちょっとー！？」

ズルズル引きずられて行きながら部屋から連れ出される。

まず最初に連れてこられたのは大浴場だった。

「……………おい…まさか」

「まずはこちらでお体を清めさせていただきます」

そっ言つて僕の服を脱がしにかかる。

「わー！ストップ！ストップ！自分で出来るから大丈夫ですって！」

「とんでもない！お客様の手を煩わせるわけにはいきません」

一応抵抗するも一喝されてしまう。

「わかったよ……………って！なんで貴女たちまで脱いでるんですか！？」

今度は僕を捕まえていたメイドさん達まで脱ぎはじめた。

「……………？なにを驚いているのですか？浴室に入るのに服を着ていては濡れてしまうでしょう。だから脱いでいるんです」

「いや…まあ……………その意見はごもっともではアリマスケド……………ボクは男でもあるワケでして……………」

僕はしどろもどろになりながら説得（？）を続けたが意味がなかった。

あつという間に服を脱がされて浴室に連行されてしまう。

もちろん彼女たちも服のかわりにバスタオルを体に巻いて同行する。

僕はなるべく彼女たちを見ないように目線を逸らしていた。

なにせ彼女たちは体にバスタオルを巻いている以外なにも着ていないのだ。

一応僕の方も腰に同じように巻いているからとりあえず大丈夫だと思いたい、正直あまり当てにならない。

（はうっ！）

その予想は大当たりだった。

同じ大当たりなら宝くじか競馬のほうがよっぽど良かった。

大浴場には幾人もの女の人たち（たぶんメイドさん）が待っていたのだ。

それも、皆さん同じようにバスタオル一枚って格好でだ。

もはや目のやり場どころと言う問題ではない。

前を見ても女の子。

左右を見ても女の子。

後ろを振り返っても女の子。

まさに前後左右を女の子に囲まれた実に困った状態になっていた。

……………だれだ、今羨ましいなんて思った奴は？

それから全身をくまなく洗ってもらった後、髪型を整えてもらいつつ今の服に着替えさせられたのだ。

「……………はあ」

もう一度思い返してみてもため息がでる。

「これじゃタチの悪い罰ゲームだよ。……………おまけに僕の体を洗いながらコソコソとなんか言ってたし」

ちなみに彼女たちが言っていたコソコソの内容はこんな感じである。

（わっけっこう可愛い顔してるじゃん）

（へー、いい体つきね。ムダな筋肉がほとんどない）

（いやーんこの子の肌スベスベだよー！若い男の子って最高ー♪）

（あ……………なかなか大きいわね）

と、まあこんな感じである。

「忘れよ忘れよこんな事」

頭を振って今の記憶を彼方に追いやる。

コンコン。

またノックの音が聞こえてきた。

またメイドさんかと思って身構えたが、今度は違った。

「失礼します。夕食の支度が整いましたので、どうぞこちらに」

「夕食……？ああ、もうそんな時間だったのか」

と、ここである物の事を思い出した。

「そういえば僕が持っていたナップサックはどこへやったの？」

この部屋に着いたときに預かって貰っていたのだ。

だけど、今となつてはあのナップサックは元の世界から持ってきた唯一の持ち物だ。

下手なことをされては元も子もない。

「それでしたら、こちらにあります」

と、ドコからか僕のナップサックを取り出した。僕はそれを受け取ると中身を確認した。

（よし、大丈夫だ。全部あるな）

「そちらのお荷物は、ミスティーナ様より取り扱いには特に気を付けるよう言われております」

「ティナから？」

なるほど……彼女からの配慮か。

「ティナには後で礼を言わないとな」

「それではご案内します。ついて来て下さい」

僕は彼女の後をついていき、ティナの待つ食堂へ向かった。中に入るとティナがソワソワしながら座っていた。

どうやら僕が来るのを今か今かと待ちきれずにいたらしい。

「来たかタクマ。そこに座ってくれ」

ティナに促されて席に座ることにする。

「あれ？キャニーもいたんだ」

見るとティナの隣にキャニーの姿もみえた。

「ん？まあね。アイツも一緒だよ」

と、席のある一力所を差す。

「えっ！ジオもいたの？」

「おう、なんか姫さんが話したいことがあるとかで同席させてもらった」

「体のほうは大丈夫なの？」

「当たり前だ。言つたら、鍛え方が違うつて。まあ、あの時は不覚にも気絶しちゃったが、もう全然平気だ」

「……なんちゅータフさだ。」

「よし、タクマも来たことだし早く始めよう」

ティナが手を叩くと、それを合図に夕食が始まった。

「しかし、軍師……じゃなくてタクマか。変わった奴だとは思っていたが、まさか別の世界から来た人間だったとはな。姫さんから聞いたときは驚いたぜ」

意外にもジオは僕の事情を知っても大して動じてなかった。

「ティナ、なんて説明したの？」

「ん？モグモグ……なんてって全部……モグモグ……そのまま話したぞ」

ティナは魚の姿焼きを食べながら答えた。

「ティナ、行儀が悪いから食べてから喋りな」

キャニーが注意する。

「はい」

「よろしい」

なんか、お姉さんと言うよりお母さんみたいだな？

二人のやりとりをみてそんな風に思った。

「ジオの場合は中途半端な説明は意味がない。コイツはカンがいいからな、かえって怪しまれる。それに、そんな事になったらタクマに頼めるものも頼み辛くなるからな」

「頼み事って？」

ティナはお茶を飲んで一服すると、とんでもない事を言ってきた。

「うむ。単刀直入に言うぞ。タクマお前、この国の將軍になれ」

「……………は？」

「間違えた。將軍の役職を与えるから本物の軍師になれ。ついでに私の近衛騎士隊隊長も任せた」

……普通にサラッと云ってきた。

まるで買い物を頼むかのように云ってきた。

「……ち、ちよつと待ってくれよ姫さん。將軍つてことは俺と同格もしくはそれ以上つてことじゃねえか！」

これにはジオも驚いたらしく席から立ち上がってしまう。

にしても、同格つてことはもしかして……。

「あの……もしかしてジオも將軍なの？」

「ああ、軍事部門の大將をやつてる」

「で、私はその副官を務めてるの」

キャニーも答える。

(……それで、あの扱いなんだ?)

凄いの凄くないのか良くわからないが、一応関心しておく。

「まあ、そう言う事になるかな? それにあの戦いの時の作戦も、ジオならわかるはずでしょ?」

「……確かにあの作戦は見事だった。俺もあんな方法は思いつきもしなかったからな。軍師としての才能はあるのかも知れねえが……」

「それ以外では無茶だと?」

「……まあな」

「それなら大丈夫よ。何故かタクマには我が国にある伝説の秘宝マクベスの瞳 が宿っているの」

「マクベスの瞳 だと!」

ジオがこつちに振り向いた。

「この世界の全ての英知の結晶と言われた魔眼がタクマに……?」
キャニーも信じられないようにこつちを見つめる。

「ちなみに、出どころは不明よ。本人も記憶にないそうだし」

「ウソだろ……」

ジオはあまりの事に言葉をなくす。

「そ・れ・に・、タクマにとつてもメリットはあるわよ。伝説が本

当なら マクベスの瞳 と王家に伝わるこの指輪があれば神への扉が開かれると伝えられてるわ」

「神へとつながる扉？………それってもしかして」

「そ。元の世界へ帰れる手掛かりになるかもしれないじゃない？だからココは提案を受けといた良いと思うよ？大丈夫だって悪くしないから」

《そして、その人物こそキミ達が元の世界へ帰る唯一の方法を知っている》

(……………？まただ。また知らない言葉が浮かんでくる。一体どこで聞いたんだ？なんで思い出せない？)

「……タクマ？聞いている？」

「え？ああ、聞いている聞いている。そうだね、他に手掛かりは無さそうだし手伝うよ」

「ホントか！？やったー！！」

ティナはバンザイして喜んだ。

だけど、バンザイする時にお茶の入ったカップを持ったままだったから、中身が全部ジョに降りかかってしまう。

「アッチイ！………姫さん気をつけてくれよ」

「……………ゴメンナサイ」

シュンと落ち込むティナ。

……………はしゃいだり落ち込んだりと本当に忙しい娘だな。

コロコロ変わる態度に思わず苦笑してしまう。

「あゝ今笑ったでしょ！」

「ごめんごめん」

今度はふくれた顔を見せる。

ホントに面白い。

「でも本当にいいの？引き受けちゃってさ」

キャニーがそつと尋ねてくる。

「なんで？」

「よく考えてみな。將軍って役職は下の部下たちに指示を出したり

報告を受けたりするだけじゃなく、他からの提案を受けてその方針を決めなきゃならないし、その他にも色々仕事があるんだよ」

「でもそれは副官や他の部下たちが手伝ってくれるから問題ないんじゃない？ 幾ら何でも一から十まで全部一人でやるワケじゃないでしょ」

それをやったら無茶も良いとこだ。

そのやり方だと、それ以外の余裕が全く無くなる。

そうなれば、いざという時には完全に動けなくなってしまうだろう。まさに本末転倒ものだ。

「そりゃまあ、そうだけど。でもその上近衛騎士隊の隊長だよ？ そんなの無理だよ」

「キャニーさん。僕の世界にこう言うことわざがある。成せば成る。やろうと思えばどうにでも出来るってこと。それに……………」僕はキャニーを正面から見つめた。

「どんな事でも、やり方は1つじゃない。考えればいくらだって作り出せることが出来る。それが人間だ。僕たちの世界はその繰り返しで成長してきたんだ」

「……………わかった。どうやら私の杞憂だったようね。しっかり頑張るなタクマ！」

キャニーはドンって僕の背中を叩いた。

「いたっ！」

……………けっこう痛いんですけど。

「よしタクマ。夕食が済んだらさっそく近衛騎士としての仕事だ！」

そう言ってサッサと自分の分の夕飯を喰い終わる。

「速い……………」

まさにフードファイターのような喰いっぷりだ。

「ふう。私の胃袋はバケツだ」

……………どこかの某ドラマで聞いたようなセリフだな。

「相変わらず凄いのかシヨボいのかわからん例えだな」

ジオもちやつかり終了している。

それもみんなの三倍の量をすべてだ。

恐るべきドラゴンの胃袋。

「まあ、こんな量は腹八分目ってとこだ」

「アンタの八分目だと国が食料危機になりそうだわ」

「俺の腹はブラックホールかよ？」

……………それって底無しじゃん。

僕は心のなかでツツコミをいれた。

そんなこんなで夕食会が済んだ僕はジオたちと別れてティナの後を
ついて行った。

「で？僕はなにをすればいいんだ」

スタスタと長い廊下を歩いて行くティナに聞いてみる。

「なに簡単なことだ。これから私の手伝いをしてもらう」

振り向かないで応えるが心なしか楽しそうだ。

「あ、そうそう。一応タクマにも他の將軍同様に副官をつけるよう
手配しておくから、まゝ仲良くやってくれ」

「副官……………ね」

何故か知らないけど、すごくイヤな予感がするのはなぜでしょう
か？

「ここよ」

ティナの足が止まる。目的地に着いたのだ。

「この場所って……………冗談だろ？」

そこには大きな暖簾（？）らしき布が垂れ下がったスライド型の扉
だった。

扉の上には部屋の名前が書いてある。

大浴場

洋風に言えば バスルーム、スペルは bathroom

ちなみに夕食前に連れてこられた場所もココである。

「ココで一体なにを…………フロ掃除とか？」

「アホかキミは？フロと言ったら入浴するに決まっているでしょう

が」

「誰が？」

「私が」

「という事は……手伝ってもらうの意味は、まさか……」

ティナの顔がいたずらっ娘の笑みに変わる。

「そ・の・まさかよ。私の体洗うの手伝ってね♪タ・ク・マ（笑）」
顔は笑っていても目は本気だ。

今度も絶対に逃げられない現実には悔やみつつ、しぶしぶ了解した。

ああ…女の子の肌ってスベスベなんだな………グスッ。

僕は最近女難の相が出ているような気がしてきた。

一体コレからどうなっちゃうだろうか？

誰か教えてちょーだい（涙）

無情で適役な調査員（前書き）

ちよつと時間がかかりました。年越さないで良かった

無情で適役な調査員

「タクマ將軍、この書類にサインと見直しと再検討して下さい」
「はいはい」

僕は言われるままに書類に目を通した。

「おいおい。軍事関連の明細書ってほとんど居酒屋の請求書じゃないか。これはセシルさんの所に渡して、えーとこっちは……」
ティナに將軍として任命されてから早くも一週間が経とうとしていた。

が、はつきり言って忙しい。

なにせ次から次へと書類が持ち込まれてくる。

それを マクベスの瞳 で分析しながら処理していく。

幸いにもこの魔眼はこの世界の文字を自動的に翻訳してくれるので、非常に助かる。

こんな事が毎日続いているのだ。

「將軍？手を動かして下さいね」

「わかってるよシャロン」

僕はさつきから忙しく動いている女の子に返事をした。

彼女の名はシャルロット。通称シャロン。

ティナが手配した僕の副官だ。

シャロンは副官以外にも近衛隊副隊長も兼任している。

要するに僕と同じ立場にティナによってさせられたのだ。

「ところでさあ、いい加減その呼び方変えてもらえないかな？どうも馴染めない」

さすがに 將軍様 と呼ばれるのは気恥かしい。

「ですが、同い年とは言え仮にも上司ですから……」

「ついでに敬語も止めてくれれば嬉しい」

彼女は僕のところに配属された時からこの調子だ。

「それも無理です」

「なんで？」

「目上の、ましては上司に対して失礼な態度をとるなと教えられて来ましたから」

「あ…そう」

なるほど……よく言う英才教育で育ってきたのね。

（こりゃ家と正反対だわ…）

聞くところによると、シャロンは高名な武門の名家の一人娘らしい。生真面目な性格で戦いに向かない娘だという事で、ティナが引き抜いてきたのだ。

ちなみに、前の部署はジオの管轄している部隊だったようだ。

なぜか彼から感謝状が届いたが、どうも別の引き取り場所をこっそり探していたらしい。

「確かにジオだと扱いづらいだろうな」

「なにか言いましたか？」

「べつに何も」

声に出していたか。危ない危ない。

慌てて作業に戻って誤魔化す。

しばらく書類と格闘してから手を休めた。

「ふう、ここらで一休みしないか？」

僕は書類の山脈と化した机から立ち上がった。

「一休み………ですか？」

「うん。そろそろお昼だろ？昼飯にしよう」

壁に掛かっていた時計を見ると、正午を示している。

「そりゃいい！一緒に行こうぜ」

いきなり部屋の扉が大きな音を立てて誰かが入ってきた。

「わっ！」

シャロンはびっくりして持っていた書類を取り落としかけた。

この突然の訪問者は僕らのよく知る人物だった。

鎧こそ着てないが、黒いマントに竜の刺繍が施された白いジャケットを着た 人間型ドラゴン の僕と同じ将軍だ。

名前はジオフォーラム。

「ジオ………なんでこの部屋に来るかな？」

ついついため息が出てしまう。

既にこの国の女王のティナから正規の辞令が出されている今、軍事部門の大將であるジオとは管轄が違う。

本来なら気軽に訪ねて来れる立場ではないはずんだけど……。

「心配すんなって。ちゃんと自分の仕事は済んだから」

………さいですか。

「と、言うワケで早く行こうぜ。シャルロットもどうだ？」

ピタッと彼女の動きが止まる。

実は僕が彼女の事をシャロンと呼ぶのにもちゃんと理由がある。

「その名を………呼ぶなあああ!!」

ぶ厚いファイルがジオめがけて飛んでくる。

「ぶっ！」

見事に顔面に命中した。

当たったファイルは表紙を金具で補強されていて、非常に強力……

…もとい頑丈な造りになっている。

「うをおおおお……」

ジオが顔面を押さえてうずくまる。

あゝ、結構痛そう……。

まあ、痛がつてるヤツは放っておいて大丈夫だろ。

それよりも、今のはジオのミスだ。

実は彼女は自分の名前にある種のコンプレックスを持っているのだ。実はシャロンの親父さんが、武門を重視しすぎた教育のせいかわ女の子であることに不満を覚えているのだ。

それ故に女の子らしい(？)自分の名前で呼ばれる事をイヤがるらしい。

別に気にしなくても十分問題無さそうな気もするが、うかつに本名の方を言ってしまうとさっきの様な目にあう。

……しかし、じつゝに勿体ない。

藍色のショートヘアに同じく澄んだ空色の大きな瞳をしていて、全体的にスリムなスタイルをしている。

本人が気にする程のことでは無いだろうが、容姿だって悪くはない。むしろ素が良いからちよつと化粧をするだけで可愛く変身できるだろう。

それに今着ている軍服（？）の少々短めのスカートからはよく引き締まった太もみがみえる。

素晴らしい美脚だ。

あれが健康美と言うもののなのだろう。

ウムウム、善きかな善きかな。

「…………どこ見てるんですか？」

シャロンがジロツとこちらを見つめている。

既に右手には広辞苑サイズのファイルがセットされている。

いかん。早急に言い訳…………じゃなくて誤解を解かなくてはジオの二の舞になってしまう。

「い、いや見事なコントロールだな」と思ってな…………あは、あははは

「……………そうですか？別にあの距離なら誰でも当てられると思います」

「いやいや、將軍のジオに当てられる事が凄いつて」

「そうですか？」

「そうそう」

よし、誤魔化しが成功した。

「あ、でも」

「ん？」

シャロンは少し顔を赤らめてこんな事を言ってきた。

「あんまり足の方ばかり見ないで下さいね。恥ずかしいから」

……………完全にバレてましたか。

「ははは…それじゃ食堂に行こうか」

シャロンから逃げるようにサッサと部屋から抜け出す。

例によってぶっ倒れたジオはそのままだ。

「おゝ、やっと来た」

食堂でお昼のランチにしていた僕らは後からやって来たジオに手を振る。

「……まったく、置いてきぼりはねえだろ」

案の定、ブツブツ言いながらこちらにやって来る。

だけど僕は構わずに手に持っているパンを口にする。

丸型のパンの間にチーズや軽く炙ったハムなどを挟んだハンバーガーみたいな食べ物だ。パターンと言う名前らしい。

「さっきのは自爆みたいなモノだろ？僕は気にしない」

「気にしろよ。お前だつて前に一度失敗しただろうが」

「僕はちゃんと回避したぞ。なあシャロン？」

「むぐむぐ……はい、見事な回避でした。………もぐもぐ」

シャロンも口をもぐもぐしながら答える。

ちなみに彼女の方はサンドイッチのセットだ。

クラブサンドにハム&玉子サンドの組み合わせで野菜スープが付いている。

………それはともかく、女の子が食べながら喋るのはどうかと思うぞ。

まあ男でも似たようなもんだが。

で、ジオはジオで持ってきた昼飯が見事に肉オンリーのメニューだった。

ついでに言えば量がスゴい。

一言で表せば 山。

クラスで表せば エベレスト。

これだけ食べて本人は腹八分目だと言う。
恐るべしドラゴンの胃袋。

「ところでジオに聞きたいんだけど」

「ふあんだ？（なんだ？）」

「………… お前もかい。」

「今朝こつちに送られてきた請求書だよ。あれ全部居酒屋の請求書じゃん」

「ふおうは？（そうか？）」

「食い終わってから喋ってくれ…。何言っているのかわからん」

「フグフグ…ゴクン。悪い悪いコツチにも色々事情があつてな」

「事情？」

「後でわかるさ」

そう言つて食事を再開する。

（後で……………ねえ）

なんかイヤな予感して来るのは気のせいだと思いたい。

「で、各地のガルドア軍の動きはどうなっているのだ？」

地方から送られてきた報告をティナは玉座に足を組んだまま聞いていた。

「姫…ミステイナ様、お願いですからそのような格好をお止めいただけませんか？」

報告書を持っていた青年が顔をしかめる。

彼の名はセリル。

シルフィス王国の行政を統括している將軍の一人だ。

「……………？どこかおかしい姿か？」

「当たり前です！」

セリルの言うことは最もである。
今のティナの格好はノースリーブのシャツにスパッツ、あとは肩にタオルを掛けていただけだった。
実にバランスの取れた美しい肢体が見てとれる。

うーん、なんともビューティー。

「ランニングの後なら当然の格好であろう?」

「そりゃそうですが、せめて着替えてもらえませんか?」

「やだ。めんどくさい」

「……………」

ティナはブイッとそっぽ向く。

「……風邪ひいても知りませんよ」

「私は風邪などひかん」

「ああ。確かにそういうタイプですからね」

セリルは納得したように頷く。

「……………なんか、バカにされてる気がするの、は気のせいかな?」

「はい。気のせいです」

ティナの睨み付ける様な視線を、セリルはさらっとながす。

「コホン。では話を戻しましょう」

わざとらしく咳き込むと、手に持った書類を読み上げる。

セリルは行政だけでは無く、各国に対しての諜報活動の方も担当していた。

「ガルドア軍の動向ですが、静かなものです。各地の兵力もほとんど変化はありません」

「先の戦闘の影響を考慮にいれてか?」

「はい。実際の所、向こうの被害は大したことはなかった様ですからね。あの新米將軍くんのおかげとも言えますが」

新米將軍とはもちろん柘真のことである。

「天才と言うにはまだ未熟な部分がありますが……………疑問があります」

「疑問？」

「あの少年は何者ですか？この一週間あらゆる経路から調査しましたが、何も素性に関することは分かりませんでした」

「うーん、ちよつと説明しづらいわね……………ま、追々話してあげるわ。大丈夫よ。タクマは私達の味方よ」

「……………。ミステイナ様がそう言うのでしたら私は構いませんが」

「セリル將軍」

執務室の扉が開き、銀髪の青年が入って来た。

「オーリーか。何の用件だ？」

セリルは自分の副官の方へ振り返った。

「ご報告中失礼します。ジオフォーラム將軍からの情報が届きましたので報告致します」

「うむ」

『セリルへ

ワリイ、何もわからなかった。 m (——) m

請求書は後で回しとくからヨロシク。あーそれと、最近ガルドアの連中が技術者を大募集してるってさ。賃金は良いみたいだぞ？』

「……………以上です」

オーリーが読み終わると彼を除く全員がずっとこけていた。

「……………どうかしましたか？」

「あのバカ……………どういふ報告の仕方をしてるんだ？」

「あ……………愛嬌はある報告ね」

セリルは頭を抱えて、ティナは苦笑いを浮かべている。

「…しかし、気になる部分がありますね」

「技術者の方…ね」

「はい」

ジオからの報告が正確ならば、ガルドア帝国は多数の技術者を欲しがっている事になる。

「…なるほど。どうりで軍の動きがない訳です」

これを言い換えると、軍隊規模の行動は必要とせずに民間内で動いていると言うことになる。

「問題は一体何を作ろうとしているのかよ。大量の人材を集めているとなれば相当大掛かりな物になるわ」

「…たしかに、面倒な事にならなければ良いのですが」

ティナは顎に手を当てて考え込んでいた。

「セリル、すぐにここ最近の国内外の物量リストを用意して。あとタクマにもここに来るように伝えて」

「は？あの新米將軍をですか？」

「そう、ちよつと軍師としての知恵を借りようかと思ってね」

「……………わかりました」

しばらくして、ティナのいる執務室のドアがノックされた。

「どうぞ」

現れたのは柘真である。

「いきなり何の用だ？仕事中に呼び出して」

「急な用件だから呼んだのだ」

セリルは柘真を睨み付けるようにみている。

「それもそつか。……………で、用件聞く前に質問いいか？」
「なに？」

柘真はティナを指差してセリルと全く同じ質問をした。

「なんて格好してるんだよ？」

「ランニングの格好」

さらっと即答する。

「目に毒だ、着替えろ」

「別に良いではないか。前に私のオールヌードを見ただろう？」
「なっ！」

セリルは柘真とティナを交互みる。

「き…貴様、姫さまになんて事を……………！」

「ま、待て。誤解だセリル！あれはティナが無理矢理……………」

「姫さまに無理矢理あんな格好をさせたのかああ！」

「だあああっ！『に』じゃなくて『が』だ！っ！か、剣を抜くな！
あぶねえって！」

凄い形相で剣を構えるセリルに柘真は後退りしてしまう。

「しくしく……………どうしても見たいって言うから」

ティナはそれを見て泣き崩れ（るフリ）た。

「成敗！」

「煽るなー！」

振り下ろされた剣を白羽取りで受け止める。

「小僧、大人しく切り捨てられよ」

「やなこった」

それを見ながらティナだけケラケラと笑っていた。

「セリル、ただの冗談よ」

「はい？」

その一言で、セリルの力が一瞬緩んだ。

（いまだ！）

その隙に柘真は剣を持ったままおもいつきり体をひねった。

「あらよつと！」

力の抜けていた手からを奪い取る。

「しまった！」

「ふう、危なかった」

柘真はそう言うのと奪い取った剣を足元に置いた。

これなら、すぐには取り返せない。

「くっ」

セリルは悔しそうな顔でこちらを睨むが、あえて無視することにする。

「で、服装のことは別にして用件は？」

気を取り直してティナに尋ねた。

「もう終わりか？」

「当たり前だ」

ティナが残念そうにこちらを見る。

「では仕方ない。セリル、用意した書類を見せてあげて」

「わかりました」

セリルは先程頼まれた書類を柘真に渡した。

ついでに自分の剣を拾い上げる。「覚えていろよ」

なにやら因縁をつけられてしまったらしい。

「やれやれ……………それでこの書類は？」

「それはここ最近の国内外の物流のリストよ」

「なんでそんなもんを？」

「いいから、そのリストを見てどう思う？」

「どうって……………」

リストを眺めた瞬間、マクベスの瞳が輝きだした。

「……………？随分と鉄鋼や薬草関連の流通が多いな。それもガルドア帝国に向けて流れてる。……………そっか、何か大規模なプロジェクト

トをやってるな。だったら技術者も相当数動いてるはずだ」

「……………むっ」

「ふふふ……………」

柘真は書類を見ながらブツブツ言い始めた。

いつもの思考モードに入ってしまった。

「あれがマクベスの瞳の力か」

「いや……………あれはタクマ自身の力よ」

「あいつの力？」

「そう、タクマが言うにはあの魔眼には情報を引き出す事しか出来ないらしいの。だから、そこから先はタクマ本人の実力よ」

「そうですか……………」

セリルは少し納得がいかない顔をしていたが、ティナの言葉に頷いた。

「まさに 一を聞いて十を知る ね。…………… 本人は気づいてないみたいけど。それよりいい加減呼び戻しましょう。結論が聞きたいわ」

そう言っでどこからかメガホンを取り出した。

「…………… そんなモノで一体なにを？」

「しー」

ティナは気付かれないように柘真の背後に回り込む。

そしてメガホンを耳の後ろに近付けて……………。

「すうう…………… わっ！！」

耳元で大声を出した。

「…………… うわああ！」

いきなり耳元で大声を聞かされて柘真は持っていた書類を落としてしまう。

「あゝびっくりした」

「戻ったか？」

ティナが柘真の顔を覗きこむ。

「いきなり何をする」

「よしよし、戻った戻った。で、結論はどうなの？」

「それよりも先に文句を言いたいが……」

「それはパス」

「あっそう」

しつかりとスルーされてしまったので、柘真は自分の結論を語ることにした。

「えーっと、確実にわかったことはガルドア帝国は軍事目的のためではなく、民間用の施設を建設していること」

「施設だと？根拠はあるのか？」

セリルが間に入ってくるが、柘真は動じずに受け答える。

「リストを見ればわかるさ。鉄鋼関連と言ってもそのほとんどが建築用の資材だ」

「だからといってそれが軍と関係がないとは……」

「搬入先が帝都になってる。いくらなんでも、市街地のご真ん中に軍事施設を建てる訳にはいかないからな」

「それで、作っている物の正体は？」

「高確率で医療施設じゃないかな。少なくとも軍用ではないのは間違いない」

「……………うーむ、リストだけでそこまで推測するとは」

セリルは感心するかのようにならずいた。

「いやあ、結構いろんなゲームをやってきたからね」

「ゲームか……………チェスとかか？」

「え……………まあ、色々」

（やべ、別世界の人間ってのは秘密だった）

柘真は慌てごまかす。

「ん……………まあいい。お前の言う通りガルドアが技術者を集めているの

は事実だ。そこで、その建造中の施設の正体を探るために誰かを潜入させる必要がある」

「まあ、そうだな」

「そして、私は行政とは別に諜報部も指揮している」

「なるほど」

「だが、今は人手不足でな。この調査にまわせる者がいないのだ」

「それは大変だ」

「……………」

なぜかセリルがこちらに近づく。

……………危険だ。

「帰る」

「待ちたまえ」

ガシツと肩を掴んでくる。

……………非常に危険だ。

「話を最後まで聞きたまえ」

「仕事が残ってる」

「そこで今回は臨時の諜報員を使う事にした」

……………聞いちゃいねえし。

「おめでとう。君は無事に審査を通過した。晴れて我が諜報部の仲間入りだ」

「……………」

……………ちょっと待て。

「僕はやらんぞ」

「職務の事は任せたまえ。君は安心して任務に専念したまえ」

「たまえ はいらん、僕は帰る。第一、試験を受けた覚えはない」

「安心したまえ、それは君の記憶ちがいだ」

「絶対違うだろ！？っ！かどうやっても僕に潜入調査させたいだけ

だろ！」

柘真は一応抵抗を試みる。

「それは誤解だ。あくまで選ぶのは君のじ……………」

「NO！却下！反対！否定！絶対不可！」

「そうか、承諾してくれるか」

ウンウンと満足そうに頷く。

「人の話を聞けー！」

もはや手遅れとわかつてはいても、足掻かずにはいれない柘真であった。

「柘真」

眺めていたティナが口を挟んできた。

「……………なんだよ」

「頑張つてね」

この一言で柘真は崩れ落ちた。

……………と、いうか諦めた。

「……………はあ」

この日、柘真は生まれて始めて 妥協 という言葉の意味を思い知った。

……………ぜんぜん嬉しくない（涙）。

「心配するな、補佐を付ける。それに魔眼があれば問題あるまい」

「……………まあな」

セリルの言う意味も、今回の調査も自分が適役だということは柘真も理解はしていた。

調査における最も重要な事は隠密能力ではなく、理解力とそれを分析する推理能力だ。

その2つが無くてはいくら調査で忍び込んでも、なんの成果も導き出すことは不可能だ。

だが、先程の僕が出した結論のせいでその2つが十二分に使えると判断されたらしい。

「……で、いつから始める？」

「すぐに……と行きたいが、少々準備がいる。まあ、翌朝までには準備が整うだろう」

「そうか、じゃあ出発は早くて明日の昼頃か」

そう言つて柘真はティナに軽く挨拶をして部屋を出ていった。

セリルはそれを見送ると誰ともなく呟いた。

「うまくいきますかね？」

「それは、私の答えるものではないわね」

「そうですか」

ティナもセリルも柘真が去つて行つた扉を何をいつまでもなく眺めていた。

その頃、ガルドア帝国領の片隅で二人の少女が光と共に現れたと言ふ噂が流れていた。

「……ねえ、時雨ちゃん」

「……ねえ、聖ちゃん」

『ここはどこでしょうか？』

二人の幼なじみは仲良く首を傾げた。

「柘真もいないし……」

「あら、聖ちゃん。何かしらアレ」

「アレ？」

遠くに見えるのは何かの団体だった。

随分と元氣のない集団であつたが、どこかを目指しているようだった。

た。

「なんだろ……行つて見ようか？」

「大丈夫なんですか？」

「行つてみればわかるよ」

聖は時雨の手を引いてその一団に近づいていった。

「あの……うわっ」

聖が彼らの顔を見た瞬間、聖の顔が強ばった。

彼らの顔色は真っ青に染まっていたのである。

「なんでしょう……これは」

「病気ね。多分感染症だと思う」

聖は彼らを一目見て病気だと悟った。

「あの……」

集団の一人が聖たちに近づいた。

「君たちは一体……？もしかして技術者の人たちかい？」

「技術者……私達が？」

「違うのかい？」

「……えーっと」

「どーしよつか？」

（ここは合わせておいたほうが……）

（そうね）

「ええ、まあ一応」

「そうかい。じゃあ帝都の応募をみて来たんだね」

「そうなります」

時雨も頷く。

「なら一緒に来るといい。私達も帝都に向かっている所なんだ」

「えっと……あなた方は技術者では無いんですよ？」

「ああ……はい。私達は見ての通り病人でして、帝都に行けば治療をしてくれると聞いて旅をしているんですよ」

「病人……」

聖はばおつと彼らを見ていた。

「聖ちゃん？」

「……………行こう」

「え？」

「この人たちを放っておけないよ。とりあえずここがどこかは置いて、その帝都に行ってみよう！」

「聖ちゃん…………。分かりました。もしかしたら柘真さんもいるかも知れませんか」

「うん。…………おじさん、私達も一緒に行かせて下さい」

「もちろんだとも、歓迎するよ」

聖たちは病人の一团に加わることにした。

そして、柘真もまた帝都に向かおうとしている事はまだ二人は知ることが出来なかった。

「へつくし！うーむ…………」

「風邪ですか？タクマ將軍」

「なんか、誰かが噂してるみたいだな」

同様に柘真も二人が来た事は知るはずもなかった。

まあ、なんにしても帝都で出くわす事になるのは必然なので気に留めなくて問題はない。

ともあれ、別れていた三人は帝都を舞台に再会することになる。

問題のない事を祈りつつ………たぶん無駄だろうけど。

「ふえつつくしょーい！誰だよ、噂してるのは！」

チャンチャン。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9252c/>

ナイトで軍師さま？

2010年10月31日04時17分発行